

## 一 八代海周辺の横穴式石室と横穴墓

### 1. はじめに

千崎古墳群は、熊本県上天草市大矢野町維和千崎3080・3081番地他に所在する。そこは天草諸島の維和島北端にあたる。千崎古墳群はその場所に突出した細長いひとつの丘陵上に存在し、現在26基の古墳が確認されている（第2図）。また、これまでの調査により千崎5号墳の主体部は横穴式石室であることが明らかになっている。

以下では、千崎5号墳の特性と歴史的意義を解明するために、八代海周辺における横穴式石室を主体部として持つ古墳、および横穴墓を集成し、比較、検討を加える。なお、今回は八代海周辺地域として、緑川以南の熊本平野南部、宇土半島、天草諸島、八代平野、水俣地域、長島、出水平野をとりあげた。小地域区分として、天草諸島を大矢野島、維和島、戸馳島に上島北部と周囲の島々を含んだ地域である天草諸島北部と、上島南部と下島、御所浦島と周囲の島々を含んだ地域である天草諸島南部とに分けた。さらに、八代平野を氷川以北の北部、氷川と球磨川に挟まれた中部、球磨川以南の南部に分けた。また、宇土半島を、その基部と沿岸部に分け、沿岸部はさらに有明海沿岸部と八代海沿岸部に分割した。（下條）

### 2. 八代海周辺の横穴式石室と横穴墓（第1図、第1～3表）

まず八代海周辺の横穴式石室と横穴墓の分布について概観しておく。横穴式石室を主体部として持つ古墳は特に八代平野、宇土半島基部に集中している。その他に、緑川以南の熊本平野南部、宇土半島沿岸部、天草諸島北部や天草諸島南部、長島に分布が見られるが、水俣地域や出水平野にはほとんど見られない。横穴墓は宇土半島や八代平野に多く、天草諸島にも点在する。しかし、八代平野南部から出水平野にかけては横穴墓を確認できない。

なお、以下での、横穴式石室の年代観については、古城編年を基準とした（古城2007）。

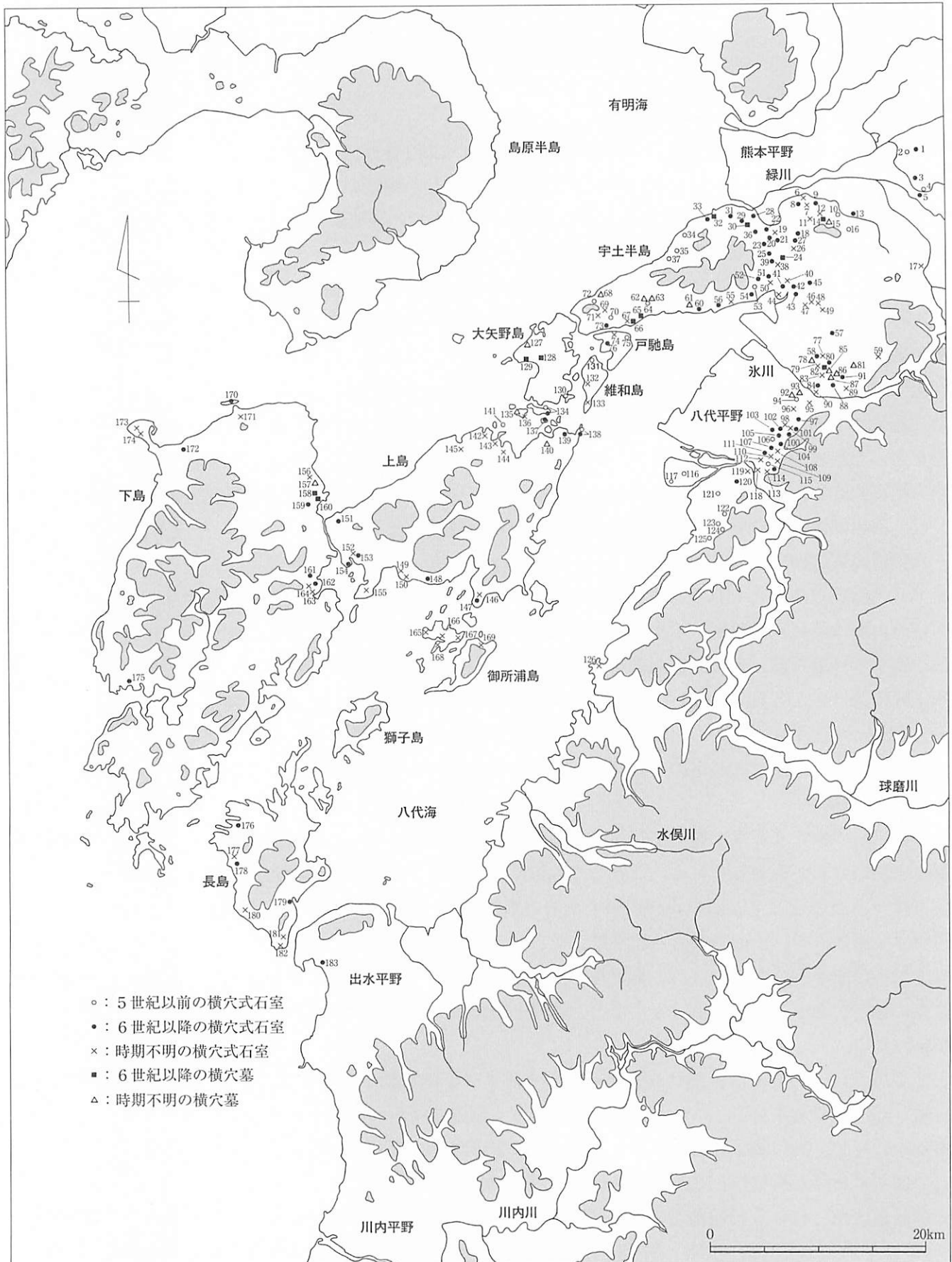
#### （1）5世紀以前

5世紀以前の横穴式石室は熊本平野南部、宇土半島有明海沿岸部、天草諸島北部、八代平野中部と南部に分布が集中している。これらの地域に所在する古墳の中で、横穴式石室を主体部として持つ古墳のほとんどが中小の円墳である（木村2007）。また、それを主体部とする前方後円墳は3例のみで、その分布も八代平野に限られる。

緑川以南の熊本平野南部では、5世紀後半に築造された井寺古墳（2：番号は第1図、第1～3表に対応）や小坂大塚古墳（4）など、石障と穹窿状天井を持つ典型的な肥後型横穴式石室が見られる。

宇土半島では、有明海沿岸部に5世紀初頭から前半にかけて城1・2号墳（37）、ヤンボシ塚古墳（35）が築造される。これらのうち、最も古く位置づけられる城2号墳は長方形プランであるのに対し、次の城1号墳やヤンボシ塚古墳は方形プランで石障を持つ。すなわち、宇土半島ではまず北部九州型の石室が導入され、その後、肥後型に変化したことが分かる。

天草諸島北部では、5世紀前半から後半にかけて、千崎5号墳（131）を含め、長砂連古墳（130）、カミノハナ古墳群（134）、竹島3号墳（141）等が築造され、それらは沿岸部に存在することが多い。これらのうち、千崎5号墳、カミノハナ古墳群、竹島3号墳では、いずれも5世紀代という早い時期から長方形プランを採用している。また、長砂連古墳のように、石室構



第1図 八代海周辺の横穴式石室と横穴墓分布図

(アミは標高200m以上を示す。番号は第1～3表に対応する。)

第1表 八代海周辺の横穴式石室と横穴墓地名表(1)

No	遺跡名	所在地	墳形	主体部	時期(世紀)	副葬品・出土遺物	備考	文献
1	鬼塚古墳	熊本県上益城郡益城町東無田		横穴式石室	6			8
2	井寺古墳	熊本県上益城郡嘉島町井寺	円墳	横穴式石室	5	鉄刀	装飾古墳	8
3	福山古墳	熊本県上益城郡御船町豊秋	円墳	横穴式石室	6	須恵器		8
4	小坂大塚古墳	熊本県上益城郡御船町小坂	円墳	横穴式石室	5	銅鏡、甲冑、鉄槍、戩手刀子、玉類		8
5	今城大塚古墳	熊本県上益城郡御船町今城	前方後円墳	横穴式石室	6		装飾古墳	8
6	栗崎古墳	熊本県下益城郡富合町本原		横穴式石室				8
7	須弥堂古墳	熊本県下益城郡富合町本原	円墳	横穴式石室				8
8	神ノ上古墳	熊本県下益城郡富合町平原		横穴式石室	6			4
9	大塚山古墳	熊本県下益城郡城南町坂野	円墳	横穴式石室	6~7	須恵器		8
10	坂本古墳	熊本県下益城郡城南町坂野	円墳	横穴式石室	5		装飾古墳	8
11	熊寺古墳	熊本県下益城郡城南町宮地	円墳	横穴式石室				8
12	保生園内古墳	熊本県下益城郡城南町吉野	円墳	横穴式石室				8
13	苜九郎山古墳	熊本県下益城郡城南町苜目	前方後円墳	横穴式石室	6	須恵器、鉄刀	装飾古墳	8
14	御領横穴墓群	熊本県下益城郡城南町東阿高		横穴墓	6	須恵器	装飾古墳	9
15	牛額横穴墓群	熊本県下益城郡城南町東阿高		横穴墓			2号装飾古墳、人骨	9
16	りゅうがん塚古墳	熊本県下益城郡城南町塚原	円墳	横穴式石室	5			8
	くぬぎ塚古墳		円墳	横穴式石室	5		塚原古墳群	13
	将軍塚古墳		円墳	横穴式石室	5	銅鏡、短甲、鉄鏃、鉄剣、刀子	塚原古墳群	8
	日焼塚古墳		円墳	横穴式石室		玉類	塚原古墳群	8
	上の原2号墳			横穴式石室	5	須恵器、鉄製品、玉類	塚原古墳群	8
17	四十八塚古墳群	熊本県下益城郡美里町岩下		横穴式石室			8	
18	三日鬼の岩屋古墳	熊本県宇土市花園町	円墳	横穴式石室	7			14
19	古城古墳	熊本県宇土市古城町	円墳	横穴式石室				8
20	金獄山古墳	熊本県宇土市椿原町	円墳?	横穴式石室				14
21	椿原古墳	熊本県宇土市椿原町	方墳	横穴式石室	6	土師器、須恵器、鉄鏃	装飾古墳	8
22	東畑1号墳	熊本県宇土市恵塚町	円墳	横穴式石室	6		装飾古墳	10
	東畑2号墳			横穴式石室	6~7			10
23	飯又古墳	熊本県宇土市恵塚町	円墳	横穴式石室	7	土師器、須恵器、鉄鏃、刀子、鉄滓	装飾古墳	8
24	大平横穴墓	熊本県宇土市栗崎町		横穴墓	7	須恵器		9
25	山王平古墳	熊本県宇土市神合町		横穴式石室	6	須恵器		14
26	桶底古墳	熊本県宇土市松山町		横穴式石室				10
27	神ノ山2号墳	熊本県宇土市松山町	円墳	横穴式石室	6	須恵器、鉄鏃、ガラス玉		14
28	梅崎古墳	熊本県宇土市椿原町	円墳	横穴式石室	6~7	須恵器、耳環	装飾古墳	10
29	城塚古墳	熊本県宇土市城塚町	円墳	横穴式石室	7		装飾古墳	10
30	尾ノ上横穴墓群	熊本県宇土市城塚町		横穴墓	6~7		横穴墓約20基	9
31	御殿山古墳	熊本県宇土市笠岩の上	円墳	横穴式石室	6~7			10
32	小田田横穴墓群	熊本県宇土市住吉町		横穴墓	6	須恵器	横穴墓11基	9
33	小池平1号墳	熊本県宇土市長浜町	円墳	横穴式石室	6~7			14
34	小松1号墳	熊本県宇土市長浜町	円墳	横穴式石室	5	刀子		10
35	ヤンボシ塚古墳	熊本県宇土市上綱田	円墳	横穴式石室	5	土師器、鉄鏃、刀子	装飾古墳	8
36	神の木山1号墳	熊本県宇土市野鶴町		横穴式石室	6	須恵器、耳環、玉類など		10
37	城1号墳	熊本県宇土市下綱田町	円墳	横穴式石室	5		城古墳群	10
	城2号墳		円墳	横穴式石室	5	鉄剣、鉄鏃、鉄斧、刀子、玉類、琴柱型石製品	城古墳群	17
38	北園鬼塚古墳	熊本県宇城市不知火町小曾部	円墳	横穴式石室				8
39	鬼塚古墳	熊本県宇城市不知火町小曾部	円墳	横穴式石室	7			8
40	大迫1号墳	熊本県宇城市不知火町高良		横穴式石室				6
	大迫2号墳			横穴式石室				6
41	塚原1号墳	熊本県宇城市不知火町高良	円墳	横穴式石室	6~7		装飾古墳	14
	塚原2号墳			横穴式石室	6~7			14
42	塚原平古墳	熊本県宇城市不知火町高良	円墳	横穴式石室	6	須恵器、馬具		8
43	神の元1号墳	熊本県宇城市不知火町高良		横穴式石室	7	土師器、須恵器、耳環、玉類		12
44	栗崎2号墳	熊本県宇城市不知火町高良		横穴式石室				6
45	男塚古墳	熊本県宇城市松橋町古俣山	前方後円墳	横穴式石室	6			8
46	年の神古墳	熊本県宇城市松橋町岡仲間	円墳	横穴式石室				8
47	狐塚古墳	熊本県宇城市松橋町岡仲間		横穴式石室				8
48	豊福古墳	熊本県宇城市松橋町豊福	円墳	横穴式石室				8
49	竹崎古墳	熊本県宇城市松橋町豊福		横穴式石室				4
50	御領東原1号墳	熊本県宇城市不知火町御領		横穴式石室				6
	御領東原2号墳			横穴式石室				6
	御領東原3号墳			横穴式石室				6
51	国越古墳	熊本県宇城市不知火町長崎	前方後円墳	横穴式石室	6	須恵器、銅鏡、鉄刀、鉄鏃、馬具、曲刀鏃、鉄斧、鉈、刀子、耳環、帯金具、玉類、銅柄	装飾古墳、人骨	8
52	桂原古墳	熊本県宇城市不知火町長崎	円墳	横穴式石室	7		装飾古墳	11
53	鶴籠古墳	熊本県宇城市不知火町長崎	円墳	横穴式石室	5		装飾古墳	11
54	鶴籠古墳2号	熊本県宇城市不知火町長崎		横穴式石室				8
	道免古墳			横穴式石室	6			6
55	鬼の岩屋1号墳	熊本県宇城市不知火町永添		横穴式石室				8
56	河添鬼の岩屋1号墳	熊本県宇城市不知火町河添		横穴式石室	6			8
57	年の神1号墳	熊本県宇城市小川町北小野	円墳	横穴式石室	7	須恵器、鉄製品、装身具	人骨	8
	年の神2号墳		円墳	横穴式石室	7	須恵器、鉄製品、玉類		8
58	西平古墳	熊本県宇城市小川町北小野		横穴式石室	6	須恵器		8
59	山中古墳	熊本県宇城市小川町東小川		横穴式石室				8
60	大市古墳	熊本県宇城市三角町大門		横穴式石室	6			20
61	大口横穴群	熊本県宇城市三角町大門		横穴墓			横穴墓6基以上	16
62	城山第1・2号横穴	熊本県宇城市三角町那浦		横穴墓				9
63	矢崎の地下式横穴	熊本県宇城市三角町那浦		横穴墓				9
64	見島崎古墳	熊本県宇城市三角町那浦	円墳	横穴式石室	5	鉄鏃、石斧、玉類		8
65	御船横穴群	熊本県宇城市三角町那浦		横穴墓	6	須恵器	横穴墓6基	9
66	西木の浦第1横穴墓	熊本県宇城市三角町前越		横穴墓				9
	西木の浦第2横穴墓			横穴墓		須恵器、鉄矛、鉄刀、鉄鏃、銅柄		9
	西木の浦第3横穴墓			横穴墓				9
	西木の浦第4横穴墓			横穴墓	6~7	土師器、鉄刀、耳環		9
67	西木浦A号墳	熊本県宇城市三角町前越		横穴式石室				16
	西木浦B号墳			横穴式石室				16
68	山の神横穴群	熊本県宇城市三角町大田尾		横穴墓			横穴墓7基	9
69	際崎1号墳	熊本県宇城市三角町波多	円墳	横穴式石室				8
70	重盛山古墳	熊本県宇城市三角町波多	円墳	横穴式石室	5	鉄鏃、鉄斧、玉類		8
71	陣内1号墳	熊本県宇城市三角町陣内	円墳	横穴式石室		土師器、須恵器、鉄鏃、鉄斧、刀子	陣内古墳群	16
72	小田良古墳	熊本県宇城市三角町中村	円墳	横穴式石室	5	鉄刀、鉄剣、鉄鏃、鉄矛、刀子、銅鈴、異形銅製品、玉類	装飾古墳、人骨	8
73	小鹿里古墳	熊本県宇城市三角町新地小鹿里		横穴式石室	6~7	須恵器、銅鏡、耳環		8
74	田井ノ浦遺跡	熊本県宇城市三角町戸馳		横穴式石室				8
75	鬼塚古墳	熊本県宇城市三角町戸馳	円墳	横穴式石室	5	短甲片、鉄刀、鉄矛、鉄鏃、玉類		8

第2表 八代海周辺の横穴式石室と横穴墓地名表(2)

No	遺跡名	所在地	墳形	主体部	時期(世紀)	副葬品・出土遺物	備考	文献
76	辺田A号墳	熊本県宇城市三角町戸馳	円墳?	横穴式石室	6	鉄鏃、刀子、耳環、管玉		8
	辺田B号墳			横穴式石室	6			8
77	六反田古墳	熊本県八代郡水川町大野	円墳	横穴式石室				8
78	太山古墳	熊本県八代郡水川町大野		横穴墓				9
79	水田古墳群	熊本県八代郡水川町大野		横穴式石室				8
80	大野窟古墳	熊本県八代郡水川町大野	前方後円墳	横穴式石室	6	須恵器		8
81	高尾横穴墓群	熊本県八代郡水川町大野		横穴墓				9
82	大野城跡横穴墓群	熊本県八代郡水川町大野		横穴墓	6			9
83	浄土古墳	熊本県八代郡水川町大野	円墳	横穴式石室				8
84	物見槽古墳	熊本県八代郡水川町野津	前方後円墳?	横穴式石室	6	須恵器、挂甲、鉄矛、鉄鏃、胡祿、馬具、鏡、垂飾付耳飾、玉類	野津古墳群	2
	姫ノ城古墳		前方後円墳	横穴式石室?	6	須恵器	野津古墳群	2
	中ノ城古墳		前方後円墳	横穴式石室	6	須恵器、挂甲、鉄鏃、胡祿、馬具、玉類	野津古墳群	2
85	岩立三つ穴横穴群	熊本県八代郡水川町立神		横穴墓				9
86	岩立五つ穴横穴群	熊本県八代郡水川町立神		横穴墓				19
87	岩立七つ穴横穴群	熊本県八代郡水川町立神		横穴墓				9
88	岩立C古墳	熊本県八代郡水川町立神	円墳	横穴式石室	6	須恵器、鉄器、馬具、耳環、玉類		8
89	馬原3号墳	熊本県八代郡水川町立神	円墳	横穴式石室				8
90	馬原4号墳	熊本県八代郡水川町立神	円墳	横穴式石室		須恵器		8
91	都園古墳群	熊本県八代郡水川町立神	円墳	横穴式石室		須恵器		8
92	上天平原古墳	熊本県八代郡水川町宮原	円墳	横穴式石室	6~7	須恵器、鉄鏃		8
93	天眞横穴墓群	熊本県八代郡水川町今		横穴墓				9
94	富貴横穴墓群	熊本県八代郡水川町今		横穴墓				9
95	大玉山2号墳	熊本県八代郡水川町早尾	円墳	横穴式石室	5			8
96	一口坂古墳	熊本県八代郡水川町早尾	円墳	横穴式石室				8
97	千禧古墳	熊本県八代郡水川町早尾	円墳	横穴式石室				8
98	境1号墳	熊本県八代市岡町中路	円墳	横穴式石室			境古墳群	20
	境2号墳			横穴式石室	6~7	土師器、須恵器、鉄器、玉類	境古墳群	20
	境3号墳			横穴式石室		土師器、須恵器	境古墳群	20
	境4号墳			横穴式石室			境古墳群	20
99	岩屋本古墳	熊本県八代市岡町中野中上		横穴式石室				8
100	平原1号墳	熊本県八代市岡町中		横穴式石室				8
	平原2号墳			横穴式石室				8
	平原3号墳			横穴式石室				8
	平原4号墳			横穴式石室				8
101	行西古墳第1号墳	熊本県八代市岡町中		横穴式石室	6	馬具	行西古墳群	8
	行西古墳第2号墳			横穴式石室	6		行西古墳群	8
	行西古墳第3号墳			横穴式石室	6		行西古墳群	8
	行西古墳第4号墳			横穴式石室	6		行西古墳群	8
102	玉泉寺1号墳	熊本県八代市岡町中	円墳	横穴式石室		須恵器		8
103	玉泉寺2号墳	熊本県八代市岡町中	円墳	横穴式石室	7	土師器、須恵器		8
104	山口1号墳	熊本県八代市岡町中	円墳	横穴式石室				8
	山口2号墳			横穴式石室	6~7	土器片、鉄器、青銅製金具		8
	山口3号墳			横穴式石室				8
105	如見第2号墳	熊本県八代市岡町谷川	円墳	横穴式石室	6~7			8
106	谷川1号墳	熊本県八代市岡町谷川	円墳	横穴式石室	6			8
	谷川2号墳			横穴式石室	6			8
	谷川3号墳			横穴式石室				8
107	清水第1号墳	熊本県八代市岡町谷川	円墳	横穴式石室	6~7	耳環	人骨	8
108	門前2号墳	熊本県八代市岡町谷川	円墳	横穴式石室	5		裝飾古墳	8
109	川上1号墳	熊本県八代市川田町東		横穴式石室				8
	川上2号墳			横穴式石室	6~7			8
110	天神古墳	熊本県八代市東片町		横穴式石室				8
111	方見堂古墳	熊本県八代市東片町		横穴式石室				8
112	御経塚古墳	熊本県八代市東片町	円墳	横穴式石室				8
113	虚空藏古墳	熊本県八代市長田町		横穴式石室				8
114	長田町古墳群	熊本県八代市長田町	円墳	横穴式石室				8
115	森の屋敷古墳	熊本県八代市長田町	円墳	横穴式石室				8
116	鬼の岩屋1号墳	熊本県八代市上片町高取	円墳	横穴式石室	6~7			8
	鬼の岩屋4号墳			横穴式石室				8
	鬼の岩屋5号墳			横穴式石室		須恵器		8
117	高取上ノ山古墳	熊本県八代市上片町高取	前方後円墳	横穴式石室	5			8
118	小風蔵1号墳	熊本県八代市風蔵町	円墳	横穴式石室	4~5		小風蔵古墳群	8
119	大風蔵西北麓2号墳	熊本県八代市風蔵町	円墳	横穴式石室	5	須恵器	大風蔵古墳群、裝飾古墳、人骨	8
	尾張宮古墳			横穴式石室	4~5		大風蔵古墳群、裝飾古墳	8
120	乙丸5号墳	熊本県八代市宮地町	円墳	横穴式石室				8
121	奈良本短冊塚	熊本県八代市奈良本町		横穴式石室				8
122	平山1号墳	熊本県八代市平山新町	円墳	横穴式石室	6~7	土師器、須恵器、耳環、鉄器、玉類		8
	平山2号墳			横穴式石室	6~7	須恵器、耳環		8
123	五反田古墳	熊本県八代市敷内町	円墳	横穴式石室	5			8
124	塩釜山1号墳	熊本県八代市日奈久大坪町	円墳	横穴式石室	5	銅鏡、鉄器、玉類	裝飾古墳	8
125	長迫古墳	熊本県八代市日奈久大坪町	円墳	横穴式石室	5			8
126	竹ノ内古墳	熊本県八代市日奈久竹ノ内町	円墳	横穴式石室	5			8
127	田川内1号墳	熊本県八代市日奈久新田町	円墳	横穴式石室	5	短甲、鉄劍、鉄斧、藤手刀子、貝輪	裝飾古墳	11
128	塚塚古墳	熊本県八代市北町海浦	円墳	横穴式石室				8
129	瀬辺原横穴墓	熊本県上天草市大矢野町上		横穴墓				5
130	田端横穴墓群	熊本県上天草市大矢野町上		横穴墓	6~7			5
131	大洞横穴墓群	熊本県上天草市大矢野町上		横穴墓	7			5
132	長砂連古墳	熊本県上天草市大矢野町中	円墳	横穴式石室	5	土師器、須恵器、鉄刀、鉄矛	裝飾古墳	18
133	千崎5号墳	熊本県上天草市大矢野町維和	円墳	横穴式石室	5	玉類	千崎古墳群	15
134	北ヶ島古墳	熊本県上天草市大矢野町維和	円墳	横穴式石室				8
135	白須古墳	熊本県上天草市松島町合津水浦	円墳	横穴式石室				7
	カミノハナ1号墳			横穴式石室	5	須恵器、短甲、鉄劍、鉄鏃、鉄斧、刀子、小玉	カミノハナ古墳群	21
	カミノハナ2号墳			横穴式石室	5	土師器、須恵器、鉄劍、刀子	カミノハナ古墳群	21
	カミノハナ3号墳			横穴式石室	5	須恵器、短甲、鉄刀、鉄鏃、刀子、玉類	カミノハナ古墳群	21
	カミノハナ4号墳			横穴式石室	5	土師器、須恵器、鉄刀、鉄製品	カミノハナ古墳群	21
	カミノハナ5号墳			横穴式石室	6		カミノハナ古墳群	21
	カミノハナ6号墳			横穴式石室	6	土師器、須恵器、鉄刀、鉄鏃、刀子、貴金具、耳環、長刺	カミノハナ古墳群	21
	カミノハナ7号墳			横穴式石室				カミノハナ古墳群
カミノハナ8号墳	横穴式石室				カミノハナ古墳群	21		

第3表 八代海周辺の横穴式石室と横穴墓地名表(3)

No	遺跡名	所在地	墳形	主体部	時期 (世紀)	副葬品・出土遺物	備考	文献
135	梅ノ木古墳群	熊本県上天草市松島町合津		横穴墓				5
136	保ガ島古墳	熊本県上天草市松島町合津		横穴式石室				7
137	梅殿塚古墳	熊本県上天草市松島町合津	円墳	横穴式石室				8
138	大戸鼻3号墳	熊本県上天草市松島町阿村	円墳	横穴式石室	6	須恵器、鉄器、玉類	羨道古墳	4
	大戸鼻4号墳		横穴式石室				4	
	大戸鼻5号墳		横穴式石室	4~5			羨道古墳	4
139	阿村鬼塚1号(東)	熊本県上天草市松島町阿村	円墳	横穴式石室	6~7	須恵器、武器、耳環		8
	阿村鬼塚2号(西)		横穴式石室				8	
140	馬場橋穴墓群	熊本県上天草市松島町内野河内		横穴墓				9
141	竹島1号墳	熊本県天草市有明町	円墳	横穴式石室				8
	竹島3号墳		横穴式石室	5	石製表飾		8	
	竹島4号墳		横穴式石室	5	土師器、須恵器、鉄器		8	
142	台田古墳	熊本県天草市有明町大浦	円墳	横穴式石室				8
143	荒瀬古墳	熊本県天草市有明町	円墳	横穴式石室				8
144	水車古墳	熊本県天草市有明町	円墳	横穴式石室		須恵器		5
145	須子鬼塚古墳	熊本県天草市有明町須子	円墳	横穴式石室				8
146	葛崎古墳	熊本県上天草市竜ヶ岳町大道	円墳	横穴式石室				5
147	大道鬼の釜古墳	熊本県上天草市竜ヶ岳町大道	円墳	横穴式石室	6			8
148	坂目古墳	熊本県天草市倉岳町宮田	円墳	横穴式石室	6			8
149	下平古墳	熊本県天草市柄本町古江		横穴式石室				8
150	沖ノ瀬1号墳	熊本県天草市柄本町古江稚児崎	円墳	横穴式石室				8
	沖ノ瀬2号墳		横穴式石室		武器、耳飾、玉類		8	
	沖ノ瀬3号墳		横穴式石室				8	
151	大松戸古墳	熊本県天草市志柿町	円墳	横穴式石室	6	土師器、須恵器		8
152	湯貫新田古墳	熊本県天草市下浦町	円墳	横穴式石室				8
153	金左衛門鬼塚古墳	熊本県天草市下浦町	円墳	横穴式石室	6~7			8
154	下浦須藤古墳	熊本県天草市下浦町	円墳	横穴式石室	6	土師器、須恵器		8
155	唐崎古墳	熊本県天草市下浦町	円墳	横穴式石室				8
156	先明瀬鬼塚古墳	熊本県天草市佐伊津町	円墳	横穴式石室		須恵器		8
157	茂木根明瀬横穴墓群	熊本県天草市佐伊津町		横穴墓				9
158	茂木根江古平横穴墓群	熊本県天草市本渡町広瀬		横穴墓	6~7			9
159	大矢崎古墳群	熊本県天草市本渡町広瀬	円墳	横穴式石室	6~7		横穴式石室墳3基	5
160	茂木根善坪横穴墓群	熊本県天草市本渡町広瀬		横穴墓	6~7			9
161	楠浦新田古墳	熊本県天草市楠浦町	円墳	横穴式石室	6			8
162	鬼ノ鼻古墳	熊本県天草市楠浦町	円墳	横穴式石室	6			8
163	南古郷古墳	熊本県天草市楠浦町	円墳	横穴式石室				8
164	観音向山古墳	熊本県天草市楠浦町	円墳	横穴式石室				8
165	田尻古墳	熊本県天草市御所浦町牧島	円墳	横穴式石室				5
166	牧向古墳	熊本県天草市御所浦町牧島	円墳	横穴式石室				8
167	黒崎古墳	熊本県天草市御所浦町牧島	円墳	横穴式石室		須恵器		8
168	串崎古墳	熊本県天草市御所浦町牧島	円墳	横穴式石室				8
169	風口古墳	熊本県天草市御所浦町	円墳	横穴式石室				5
170	通洞島南古墳	熊本県天草市五和町	円墳	横穴式石室	6	須恵器		5
171	沖ノ原西古墳	熊本県天草市五和町二江	円墳	横穴式石室				8
	沖ノ原東古墳		横穴式石室				8	
172	西河内古墳	熊本県天草郡苓北町上津深江	円墳	横穴式石室	7	土師器、須恵器、鉄器		8
173	富岡2号墳	熊本県天草郡苓北町富岡	円墳	横穴式石室				8
174	白岩崎古墳	熊本県天草郡苓北町富岡白岩崎		横穴式石室				5
175	鬼塚古墳	熊本県天草市河浦町今宮	円墳	横穴式石室	6	土師器、須恵器、鉄器		8
176	温之浦1号墳	鹿児島県出水郡長島町		横穴式石室	6~7	鉄器、耳環		1
	温之浦2号墳		横穴式石室	6~7	鉄器、刀、耳環、玉類		1	
	温之浦3号墳		横穴式石室		須恵器、鉄器		1	
177	明神6号墳	鹿児島県出水郡長島町		横穴式石室		須恵器		1
178	白金古墳	鹿児島県出水郡長島町蔵之元		横穴式石室	6~7	須恵器、銅製片、金銅製金具、耳環、玉類	小浜崎古墳群	1
	鬼塚古墳		横穴式石室	6~7	須恵器、鉄器、刀子、耳環、玉類	小浜崎古墳群	1	
179	加世堂古墳	鹿児島県出水郡長島町		横穴式石室	6	須恵器片、鉄刀、鉄器		1
180	唐塚古墳	鹿児島県出水郡長島町城川内		横穴式石室				3
181	日之浦遺跡	鹿児島県出水郡長島町山門野		横穴式石室				3
182	酒之尻遺跡	鹿児島県出水郡長島町		横穴式石室				8
183	新田ヶ丘1号墳	鹿児島県阿久根市鶴本		横穴式石室	6~7		鰐古墳群	1
	新田ヶ丘2号墳		横穴式石室	6		鰐古墳群	1	

## 第1~3表に関する参考文献

- 池水寛治 1982『長島の古墳』長島町教育委員会
- 今田治代編 1999『野津古墳群Ⅱ』竜北町文化財調査報告書第1集 竜北町教育委員会
- 鹿児島県埋蔵文化財情報データベース (<http://www2.jomon-no-mori.jp/gis/>)
- 熊本県教育委員会 1998『熊本県遺跡地図』
- 坂本経堯・坂本経昌 1971『天草の古代』私家版
- 坂本経堯 1972『古墳時代』不知火町史 不知火町：pp.41-88
- 杉井 健 2007『古墳時代の火矢野』『上天草いにしへの暮らしと古墳』上天草市史大矢野町編1 上天草市：pp.123-345
- 第2回九州前方後円墳研究会編 1999『九州における横穴式石室墓の導入と展開』第2回九州前方後円墳研究会大会発表要旨・資料集
- 第4回九州前方後円墳研究会編 2001『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第4回九州前方後円墳研究会大会発表要旨・資料集
- 高木恭二他 1987『宇土半島基部古墳群』宇土市埋蔵文化財調査報告書第15集 宇土市教育委員会
- 高木正文編 1984『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会
- 中岡昇編 1992『神の元1号墳』熊本県文化財調査報告書第122集 熊本県教育委員会
- 野田拓也他 1975『塚原』熊本県文化財調査報告書第16集 熊本県教育委員会
- 古城史雄他 2002『古墳時代』『新宇土市史』資料編第2巻 考古資料・金石文・建築物・民俗 宇土市：pp.91-280
- 前田真由子編 2006『千崎古墳群第4次調査報告』『上天草市史大矢野町編資料集』2 上天草市：pp.1-26
- 三角町史編纂協議会専門委員会編 1987『古墳時代』『三角町史』三角町：pp.118-169
- 城二号墳発掘調査団編 1981『城二号墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第3集 城二号墳発掘調査団・宇土市教育委員会
- 南健太郎編 2005『長砂連古墳石障実測調査報告』『上天草市史大矢野町編資料集』1 上天草市：pp.39-50
- 村井真輝編 1979『五ツ穴横穴群』熊本県文化財調査報告書第34集 熊本県教育委員会
- 村井真輝編 1980『境古墳群・境遺跡』熊本県文化財調査報告書第42集 熊本県教育委員会
- 米倉秀紀編 1982『カミノハナ古墳群2』研究室活動報告14 熊本大学文学部考古学研究室

造に石障を採用する古墳が存在する一方で、腰石としての役割を果たしていない腰石状の石材が石室基底部に配置される古墳も同時に認められる点が、当地域の特色として挙げられる。

八代平野

八代平野では、4世紀末から5世紀末にかけて小鼠蔵1号墳(116)、尾張宮古墳(117)、高取上ノ山古墳(115)、田川内1号墳(125)が築造され、八代平野中部と南部に分布が集中している。小鼠蔵1号墳、尾張宮古墳、田川内1号墳には装飾が施された石障、砂岩等の割石を小口積みすることで構築された壁体構造、穹窿状天井、方形プランという初期の横穴式石室の要素が多く見受けられる。その中でも、小鼠蔵1号墳と尾張宮古墳は、熊本県下における横穴式石室の導入期を考える上で重要である。

その他の地域

水俣地域や長島、出水平野では5世紀以前には、明確な横穴式石室が見られない。  
なお、今回の集成では5世紀以前の横穴墓は確認できなかった。

## (2) 6世紀以後

6世紀以後

6世紀になると横穴式石室は、緑川以南の熊本平野南部や宇土半島基部から八代海沿岸部、天草諸島南部、八代平野北部と中部に分布が集中するようになる。横穴式石室は5世紀代に続き、中小の円墳の主体部として採用される。その一方で、熊本平野南部の今城大塚古墳(5)や、宇土半島基部の国越古墳(51)、八代平野の大野窟古墳(80)などのように、大規模な前方後円墳の主体部としても採用されるようになる。

熊本平野南部

熊本平野南部では、宇土半島寄りに古墳が集中している。6世紀後半に築造された今城大塚古墳や甚九郎山古墳(13)は、横穴式石室を主体部とする前方後円墳であるが、その他は墳形が円墳で、長方形の玄室プランを採用していることが多い。

宇土半島

宇土半島では、宇土半島基部から八代海沿岸部に横穴式石室の分布が集中している。6世紀前半には国越古墳では腰石の使用が見られ、6世紀中頃から塚原平古墳(42)、神の元1号墳(43)、三日鬼の岩屋古墳(18)のような円墳にも腰石が使用された。これらの古墳はいずれも長方形プランを採用している。腰石技法や長方形プランの導入から、当地域の5世紀以前の古墳との間に明らかな違いが認められる。また、6世紀後半になると、梅崎古墳(28)や城塚古墳(29)、御殿山古墳(31)が築造され、板石状の石材を削り抜いて、横穴式石室の入り口とした刳抜玄門が顕在化する。

天草諸島

天草諸島では、その北部にかわり南部に分布が集中するようになる。6世紀後半に築造された大松戸古墳(151)では6世紀代の石室構造の要素である石棚を備えつつも、一方で、古い時期の横穴式石室の特徴とされる玄室と出入口部との段差が見られる。天草諸島北部のカミノハナ5号墳(134)や、天草諸島南部の下浦須森古墳(154)、楠浦新田古墳(161)などの横穴式石室では腰石状の石材が石室基底部に据えられている。5世紀代に引き続き、石障類似の石材配置であり、他地域と比べ、腰石導入の様相は複雑である。

八代平野

八代平野では、分布の集中がその南部と中部から、北部と中部に変化した。6世紀初頭から後半にかけて野津古墳群(84)に物見櫓古墳、姫ノ城古墳、中ノ城古墳が連続して築造された。この時期、熊本県地域では墳長50m以下の古墳が大半を占める中で、これらの古墳は、すべて墳長が70mから100m規模の大型前方後円墳である。また、その中でも、物見櫓古墳の垂飾付耳飾など豊富な副葬品から、中央政権や朝鮮半島諸地域との結びつきを持つ、きわめて有力な地域であったことがうかがえる。行西古墳群(100)や大野窟古墳では長方形プランの採用に加え、複室構造をなし、5世紀以前の古墳との差異が明らかである。こうした変化とともに腰

石、石棚、石屋形の導入が進み、石室石材の巨石化も進行した。

長島や出水平野では、6世紀中頃から7世紀初頭にかけて横穴式石室を主体部に持つ古墳が築造されている。脇本古墳群（183）の新田ヶ丘1・2号墳では方形プラン、石障構造を採用しており、構造の一部に肥後型横穴式石室の影響が考えられる（池水1982）。長島では、方形や長方形プラン以外に白金古墳（178）のように台形状プランを採用する例が見られる。

横穴式石室より約1世紀遅れて登場した横穴墓は八代平野、宇土半島沿岸部、天草諸島北部、南部に分布が見られ、その多くは沿岸部に点在する。コの字形屍床、阿蘇溶結凝灰岩を多用した閉塞石といった横穴式石室の要素の一部のみを取り入れる例が多い。

八代平野では、高尾横穴墓群（81）や岩立三つ穴・五つ穴・七つ穴横穴墓群（85・86・87）が築造され、高尾横穴墓群ではコの字形屍床が認められる。

宇土半島では、6世紀末から7世紀初頭にかけてその基部と先端部に横穴墓が分布している。多くの横穴墓が10基以下で構成される中で、尾ノ上横穴墓群（30）は約20基の横穴墓を持つ宇土半島最大の横穴墓群である。

天草諸島では、6世紀後半から7世紀にかけて天草諸島北部の大矢野島に諏訪原横穴墓（127）、田端横穴墓群（128）や犬飼横穴墓群（129）が、一方、天草諸島南部では茂木根江古平横穴墓群（158）や茂木根善坪横穴墓群（160）などが築造された。田端横穴墓群は現在の地形では内陸に位置するが、古墳時代には現在と異なる景観が予想され、現存する多くの横穴墓も海に面していた可能性が指摘されている（杉井2007）。

### 3. まとめ

八代海周辺における横穴式石室と横穴墓の分布の移り変わりをまとめる。

5世紀から6世紀になると宇土半島では、有明海沿岸部から八代海沿岸部および半島基部へ横穴式石室の分布が移動している。天草諸島では、その北部から南部に分布の集中が移動している。また、八代平野ではその南部の分布が希薄になり、平野北部、中部での分布が急増する。さらに、長島や出水平野では6世紀になり初めて横穴式石室が見られるようになる。横穴墓の分布は、天草諸島南部では横穴式石室の分布域と重なる。また、横穴式石室の分布が希薄になった宇土半島から天草諸島北部にかけて、分布の集中が見られるようになる。

以上のように八代海周辺において、5世紀から6世紀に移ると、横穴式石室の分布域が大きく変化するのが確認できる。天草諸島南部では、古墳時代前期から中期にかけて、主に地下式板石積石室墓が築造されていたが、後期になると横穴式石室を主体部とする古墳が築造されるようになる。以前とは異なる埋葬施設を採用したこの動きを、天草諸島南部が古墳時代社会に組み込まれていく過程と見なすこともできる（杉井2007）。

千崎古墳群の位置する天草諸島北部では、カミノハナ古墳群や大戸鼻古墳群などのように5～6世紀に継続して横穴式石室が築造される古墳群が存在する。千崎古墳群も石室、あるいは箱式石棺を主体部としてもつ古墳が合わせて26基存在し、長期間にわたって古墳が築造されたと考えられる。ただし、6世紀代に位置付けられる古墳は確認されておらず、また多数の箱式石棺の分布と合わせ、カミノハナ古墳群などとは性格を異にする可能性が高い。

千崎古墳群には今回調査された千崎5号墳以外にも、横穴式石室を主体部とする可能性が高い古墳がいくつかある。このような古墳の様相が明らかになることで、天草諸島における横穴式石室の伝播と拡散の様相が明らかになっていくだろう。（長田）

## 二 調査経過

### 1. 過去の調査（第1次～第5次調査）

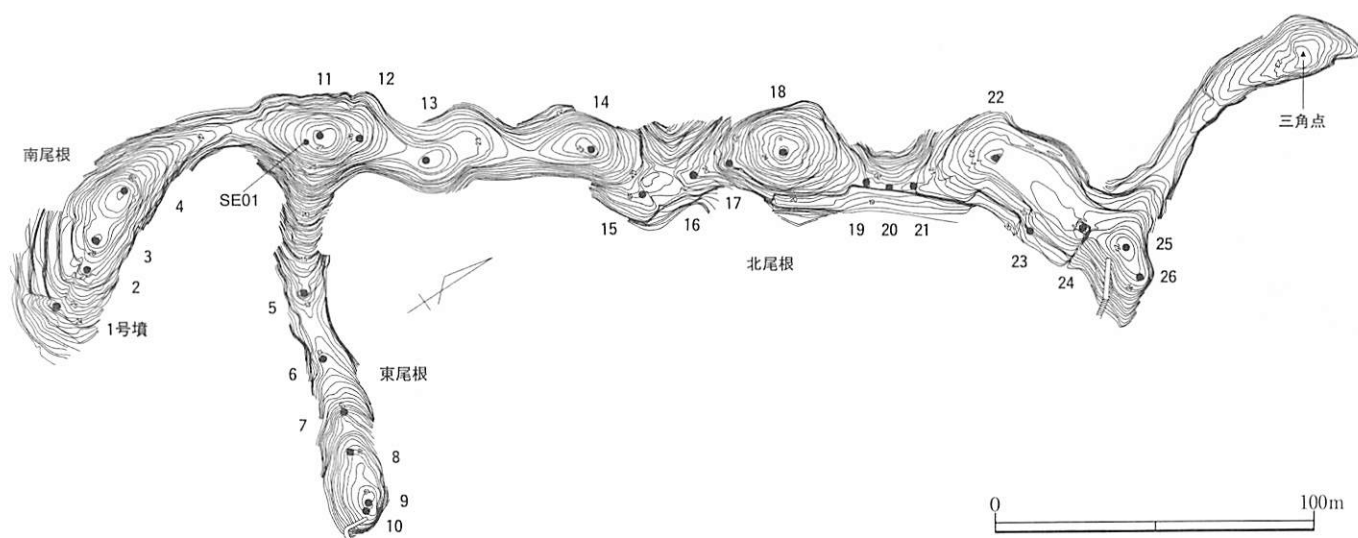
**第1次調査** 千崎古墳群に対する初めての考古学的調査（第1次調査）は、1955年、玉名高等学校考古学部によって行われ、古墳の分布状況が確認されるとともに、4基の箱式石棺が発掘調査され、鉄剣等の副葬品や人骨が検出された（田辺1955 a・1955 b）。

**第2次調査以降** その後、約半世紀のあいだ、千崎古墳群の調査は行われなかったが、2002年度に町史編纂事業を開始した大矢野町（2004年度から上天草市）によって、2003年度より4次にわたる継続的な調査（第2次～第5次調査）が実施された。それは、町史編纂委員会委員杉井健（熊本大学文学部）を担当者とするもので、古墳群が営まれた千崎丘陵全体の測量調査、地表に現れる箱式石棺や石室の現状実測図作成、5・6・10号墳の発掘調査がおもな内容であった。

それらのうち、測量調査および現状実測図作成においては、古墳分布の全容が明らかにされるとともに（第2図）、すべての箱式石棺および石室の現状における記録が作成された。一方、発掘調査において、6号墳では地山面にまでおよぶ徹底的な破壊を受けていることが判明したのみであった。しかし、5号墳では、その墳丘が直径約6mの円墳であること、主体部がごく狭い羨道を有す横穴式石室であることが明らかとなった。その結果、従来積石塚とされてきたものは破壊された石室石材が散乱した状況をとらえたものであることが判明した。ただ、調査期間が限られていたこともあり、第5次調査中に石室実測や断ち割り調査を実施することができず、それらは他日に期された。他方、10号墳では、箱式石棺の蓋石が取り外され、棺内および棺外の断ち割り調査が実施された結果、2段墓壙であること、北側棺外テラス面にミニチュア農工具が副葬されていることが判明した。しかし、棺外の未発掘部分に別の副葬品が存在するか否かの確認作業が残された（森編2005、前田編2006、三好・仙波編2007）。（杉井）

### 2. 第6次調査

**第6次調査** 上天草市史編纂事業は2007年度で終了し、それまでの調査成果を盛り込んだ書籍が2007年6月に刊行された（甲元・杉井編2007）。しかし、上述したように、千崎古墳群の現地調査につ



第2図 千崎古墳群の古墳分布図（1/2400）



第4表 2007年設置測量基準点の現場座標

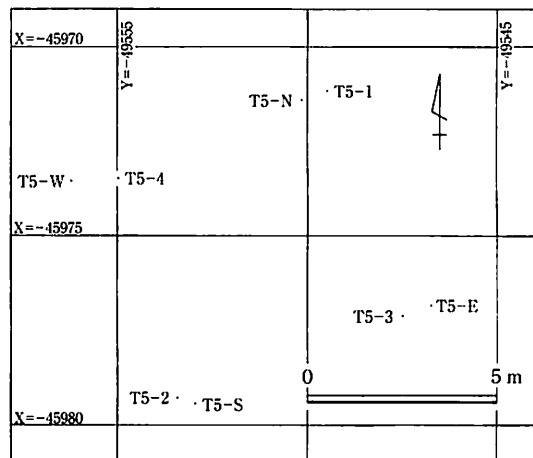
基準点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	標高 (m)	備考
S E 01	0.000	0.000	26.783	
S E 40	312.565	-31.979	23.80	四等三角点汐浜
四等三角点後大潟	-434.134	-1218.440	22.98	
T 5 - 1	4.354	48.422		2004年設置
T 5 - 2	-4.636	49.250		〃
T 5 - 3	0.286	53.189		〃
T 5 - 4	-0.464	44.925		〃
T 5 - N	3.798	47.977		2007年設置
T 5 - S	-4.521	49.721		〃
T 5 - E	0.911	53.694		〃
T 5 - W	-1.149	43.908		〃

第5表 2007年設置測量基準点の国土座標

基準点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	備考
S E 01	-45949.870	-49593.197	
S E 40	-45665.753	-49458.995	四等三角点汐浜
四等三角点後大潟	-45691.847	-50860.717	
T 5 - 1	-45971.167	-49549.492	2004年設置
T 5 - 2	-45979.291	-49553.429	〃
T 5 - 3	-45977.113	-49547.513	〃
T 5 - 4	-45973.484	-49554.976	〃
T 5 - N	-45971.413	-49550.160	2007年設置
T 5 - S	-45979.436	-49552.966	〃
T 5 - E	-45976.839	-49546.758	〃
T 5 - W	-45973.545	-49556.200	〃

いては、多くの課題が残されたままであった。そこで、熊本大学文学部考古学研究室を主体とし、5号墳横穴式石室の実測および墓壙構造の解明、10号墳箱式石棺の棺外副葬品有無の確認を目的とした発掘調査を実施した。調査期間は2007年9月10日から10月6日までの27日間である。

5号墳では、まず、横穴式石室の新たな主軸 (T 5 - N・T 5 - S ライン) を設定した。それは、埋土掘り下げ以前の石室上面プランをもとにした昨年度までの主軸 (T 5 - 1・T 5 - 2 ライン) と、床面を検出し終えた段階の石室平面プランとの間に、若干のずれが生じていたためである。そして石室実測を開始したが、玄室空間の狭さに手間取り、調査終了の直前まで図面の作成に追われることとなった。一方、墓壙の検出作業は、石室の東西および北側に設定した調査区において行った。これらのうち東西の調査区では、調査開始後すぐに墓壙ラインが検出され、墓壙埋土の掘り下げに移行した。そして、石室実測作業と並行して行った玄室床面断ち割り作業の成果を合わせ、T 5 - N から南 4 m ラインにおける石室・墓壙横断面図を作成した。その結果、石室壁体の持ち送り開始レベルと墓壙内に控え積み石材を配置し始めるレベルが一致すること、墓壙底はほぼ平坦面をなすが、腰石設置箇所については深く掘り込まれている可能性が高いことなど、石室構築過程に関わる重要な所見をいくつか得ることができた。なお、石室北側においては、一様でない地山岩盤の様子に惑わされたが、調査区を拡張し、広く面的に検討することによって墓壙ラインを確定した。



第3図 5号墳基準点の位置関係

10号墳では、昨年度の最終掘り下げ面を検出したのち、上段墓壙埋土の掘削を開始した。そして、下段墓壙ライン全体を検出した段階で掘り下げを停止した。その結果、西側棺外の下段墓壙埋土上面に砂岩片が集中して置かれていることを確認したが、昨年度検出した鉄器以外の副葬品は存在しないことが判明した。これと並行して、石材加工痕の詳細な観察を行った。

なお、10月4日には現地説明会を開催し、維和中学校の1年生と地元住民の方々を合わせて約30名の参加者を得た。

### 3. 今後の検討課題

数次にわたる調査を行ったが、5号墳では石室閉塞状況の詳細が未確認である。また、10号墳では、調査終了後の整理作業において、上段墓壙埋土上面あるいは石棺周囲に散布していた石材が北側蓋石と接合することが判明した。しかし、接合後の実測図が作成できておらず、真俯瞰写真も未撮影である。こうした点については、次年度以降に期したいと思う。(杉井)

今後の課題

### 三 5号墳の調査成果

#### 1. 過去の調査経過（第2次～第4次調査）

5号墳は、11号墳のある尾根分岐点から急斜面を南東へ50m程下った、東尾根中央の鞍部に位置する。

第2次調査 2003年度の第2次調査開始時点において、5号墳は高さ1m程度の低い円丘状の高まりとなっており、その上面、南北約7m、東西約4mの範囲に多くの石材が散布した状態であった。そして、当墳には石室の下半部が残存している可能性が高いと推測した（森編2005）。

第3次調査 2004年度の第3次調査では、現状での石材散布状況の記録と石室構造の把握を目的とした。そこで、散在する石材および地表にわずかにのぞく石室上面プランに合わせた暫定的な主軸線（T5-1・T5-2ライン）を設定し、石材散布状況の実測図の作成、石室内埋土の一部掘り下げを行った。その結果、石室上面の輪郭を明瞭に検出し、石室の下半部が良好に残存していることを確認した。そして、千崎古墳群でこれまで積石塚とされてきたものは、破壊された石室石材が散乱した状況を捉えたものであると判断した。なお、この時点では5号墳の主体部は竪穴式石室であると推定していた（森編2005）。

第4次調査 2005年度の第4次調査では、墳丘の形態、規模の確認を目的のひとつとして、墳丘の四方に調査区を設定し、掘り下げを行った。その結果、5号墳は尾根筋の標高が高い側では浅い溝を掘り込むことによって、一方、それ以外のところでは地山を削り、平坦面を造り出すことによって墳丘を画していること、つまり、その墳丘の下半部は地山の岩盤を削り出すことによって形成されていることが判明した。また、当墳は直径約6mの円墳であると推定した。

同時に石室構造の解明を目的とし、石室内埋土の掘り下げを行った。その途中、石室南側に羨道が検出され、5号墳の主体部は狭い羨道を持つ横穴式石室であることが判明した（前田編2006）。しかし、時間的制約のため、石室の本格的な調査は次年度以降に託された。（梶）

#### 2. 主体部の調査経過（第5次・第6次調査）

第5次・第6次調査 2006年度の第5次調査では、横穴式石室の構造解明を目的とした。石室内埋土には石室石材と考えられる転落石が多く含まれており、これら石材の出土状況、および石室埋土の堆積状況を慎重に記録しながら、掘り下げを行った。

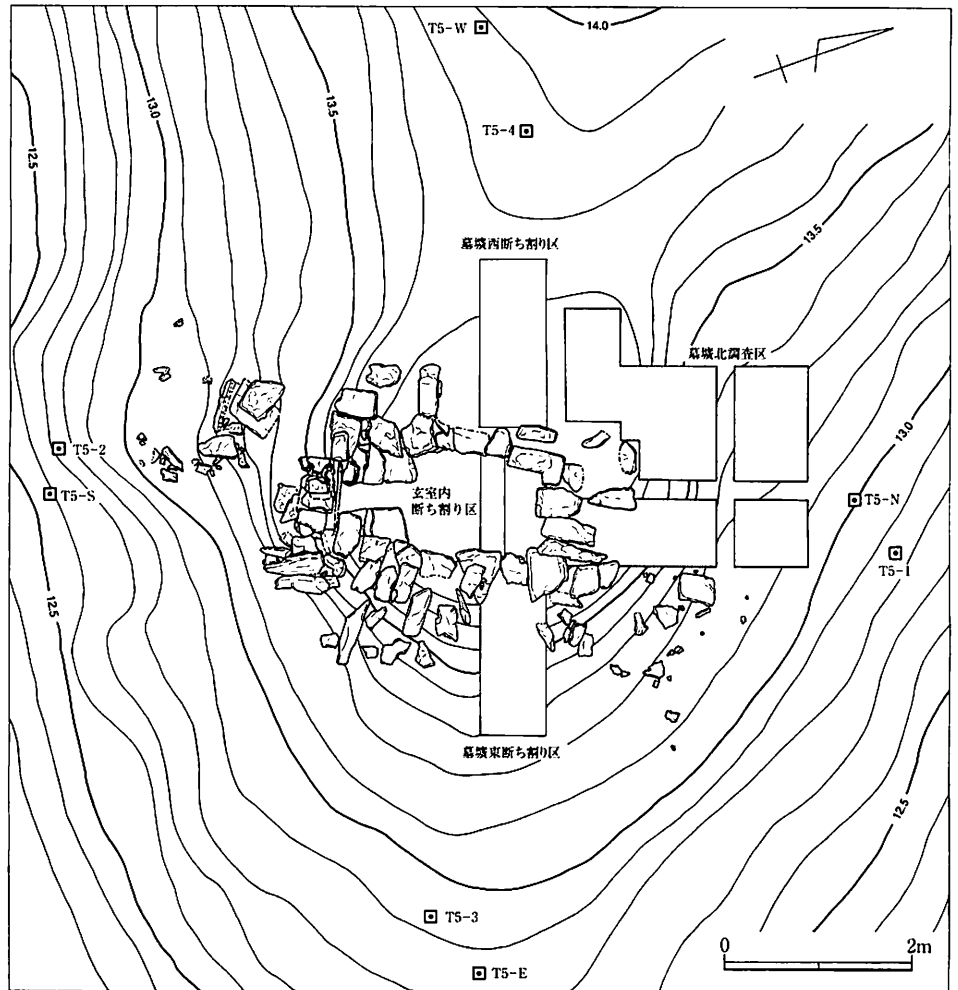
掘り下げの途中、玄室内東側に仕切り石によって区画された屍床を確認した。屍床内上半部の埋土中にも転落石が多く含まれていたため、これら石材についても屍床主軸にそった軸線を基準として記録を行いながら、掘り下げを進めた（第5・8図）。屍床内では、追葬面直上にて赤色顔料が確認された。また、初葬面直上では勾玉10点、白玉13点を原位置で検出した。一方、羨道についても掘り下げを行い、羨道床面を構成する板石、粘質土を検出した。

また、5号墳の石室内から検出された転落石は大学に持ち帰り洗浄、注記を行い、屍床内埋土については全てふるい作業を行った。その結果、屍床内埋土からは勾玉1点、白玉15点が新たに検出された。これにより、原位置にて検出したものと合わせて、初葬面直上には勾玉11点、白玉28点が存在していたことが明らかとなった。

なお、時間的制約のため、石室の実測作業と構築過程の解明、および前庭部の構造の解明は次年度の課題として残された。

第6次調査となる今年度は、5号墳の石室の実測作業と構築過程の解明を目的とした。実測図は新しく設定した主軸線（T5-N・T5-Sライン）、およびT5-Nから南に4mライン（T5-E・T5-Wライン）を基準に作成した（第4図）。

石室実測作業と並行して、石室の西、東、北に調査区を設定し、墓壙の検出を行った（第4図）。この際、西、東の調査区に関しては断ち割り作業により、墓壙埋土の状況と墓壙底を確認した。さらに、玄室内でも断ち割り作業を行い、墓壙底の構造を把握した。そして、T5-Nから南4mラインでの石室・墓壙横断面図を作成した（第9図）。



第4図 5号墳調査区設定図（アミ部は墓壙北調査区を示す。）

これまでの調査により、5号墳では墳丘の形態、規模、石室構造などを把握することができた。ただし、前庭部は未調査であり、石室閉塞状況の詳細の確認は今後の課題として残されている。（梶）

### 3. 第6次調査における調査区の設定（第4図）

5号墳では、2004年度に石室上面プランをもとにした主軸線（T5-1・T5-2ライン）を設定していた（森編2005）。しかし、石室実測のためには、その主軸線では不都合が生じたため、今回新たに主軸線を設定し直した。新たに設定した主軸線は、石室北側のT5-Nとそこから南に8.5mのT5-Sを結んだラインであり、これは石室内両側壁と平行し、奥壁と直交する。なお、主軸方向はN19°Eである。また、T5-Nから南に4mの地点で主軸線に直交する軸線（T5-E・T5-Wライン）を設定した。T5-E、T5-Wともに主軸線（T5-N・T5-Sライン）より5mの位置にある。

主軸線の設定

今回の調査では墓壙検出のため、調査区を石室の西、東、北に設定した。名称は順に、墓壙西断ち割り区、墓壙東断ち割り区、墓壙北調査区である。墓壙西、東断ち割り区はそれぞれT5-W、T5-Eより石室側に2.5mの地点から長さ1.8m、T5-E・T5-Wラインより北へ0.7mの範囲に設定した。北調査区は、T5-Nから石室側に1.5mの地点から長さ1.4m、主軸線より東へ0.7mの範囲に設定したが、調査途中でその北、西側に3つの拡張区を設け、一部断ち割り作業を行った。また、玄室下の墓壙底構造を把握するため玄室内断ち割り区を設けた。その範囲はT5-E・T5-Wラインより北へ25cm、東西1.3mである。（梶）

調査区の設定

#### 4. 横穴式石室の構造

##### (1) 石室の構造 (第5図)

5号墳の主体部は横穴式石室で、直径約6mの円墳中央に位置する。石室の全長は2.27mである。主軸方向はN19°Eであり、尾根筋に直交し、南に開口する。石室の上半部は崩壊し、残存していない。以下、石室の構造について記述するが、側壁の名称は羨道から玄室を見て右側を右側壁、左側を左側壁とする。また、袖部の名称も同様に右袖部、左袖部とする。

##### i) 玄室

**玄室** 玄室の平面形は、石室の主軸方向に長い長方形をなす。規模は長さ1.68m、幅1.25mである。幅はほぼ一定しており、側壁ラインはほぼ直線をなす。現存する壁体の高さは、もっともよく残存している左側壁で、床面から85cmである。

壁体は腰石上に自然石、または割り石を平積みすることで構築されている。玄室壁体に持ち送りが見られることから、天井は穹窿状をなしていた可能性がある。壁体に使用された石材は長さ10cm程の小さなものから60cm程の大きなものまでさまざまである。

壁体石材の間には、明褐色の粘質土が残存していた。屍床内の埋土堆積状況を加味して判断すると、石室壁体全面にそのような粘質土による目貼りがなされていた可能性がある。

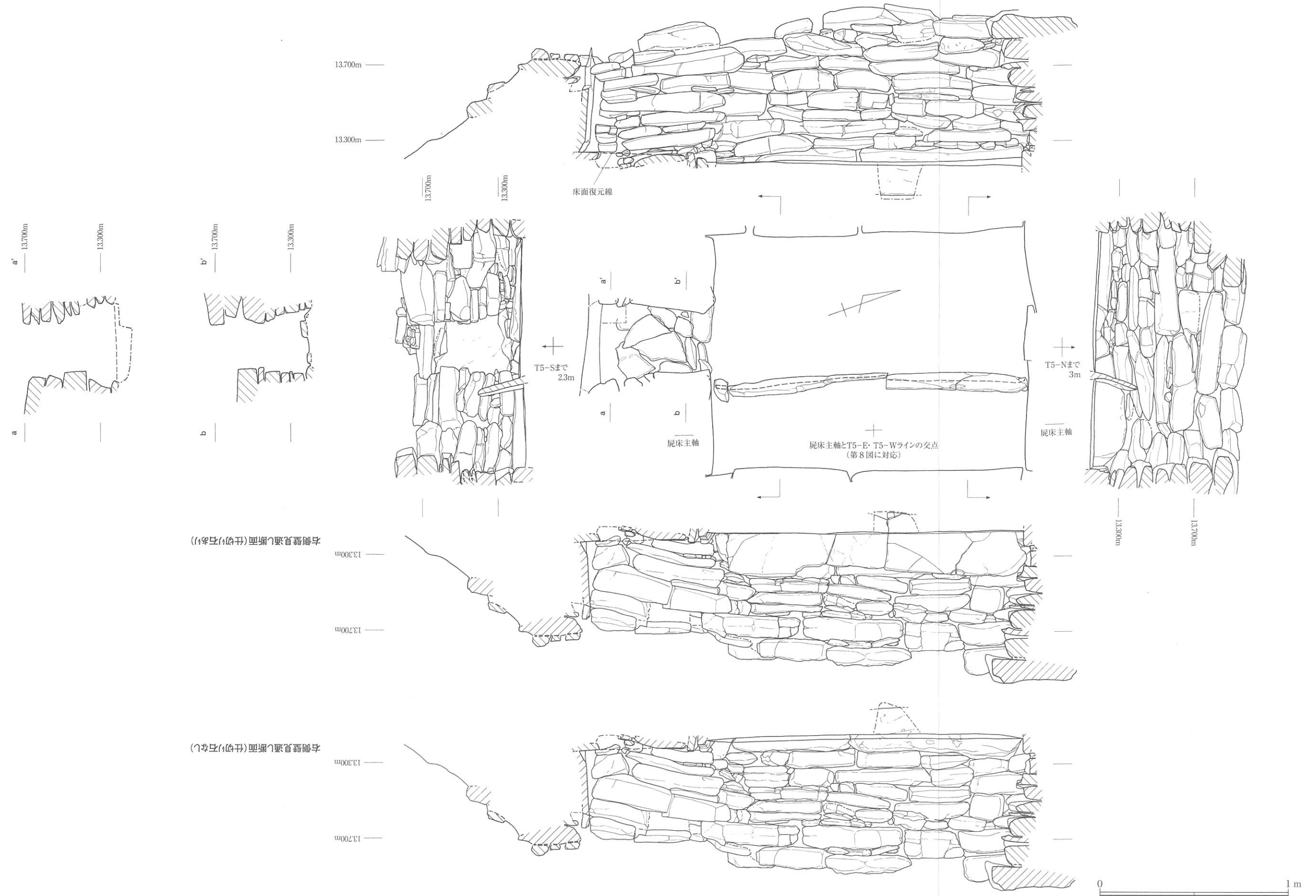
**右側壁** 右側壁には現状で7、8段分の石積みが残存する。基底部として腰石が3枚配置されている。腰石の床面からの高さは、奥壁側で13cm、前壁側で9.5cmである。腰石上面は石室の北端と南端で大きなレベル差は見られず、ほぼ水平である。また、後述する玄室内の断ち割り調査により、腰石の3分の2程度は床面下に埋められていることが判明した。その埋設深度は約15cmである。腰石上に積まれた石材は、長さ50cm程の大きなものから長さ10cm程の比較的小さなものまでである。小さな石材は、石積み上面の水平を整えるために用いられている。

**左側壁** 左側壁には現状で7～9段分の石積みが残存する。基底部として腰石が3枚配置されている。腰石の床面からの高さは、奥壁側で7.5cm、前壁側で2.5cmである。腰石上に積まれた石材は、右側壁と同様の様相を呈している。

**奥壁** 奥壁には現状で8、9段分の石積みが残存する。基底部として2枚の腰石が用いられ、両石材の端部が一部重なるように配置されている。腰石の床面からの高さは、右側壁側で17cm、左側壁側で7cmであり、奥壁腰石の上面は右側壁側が左側壁側よりも高い。屍床に当たる箇所の腰石のみ高く設置されたとも考えられる。なお、左側壁側の腰石上には小さな石材が多く積まれており、これらによって、いったん右側壁側の腰石の上面と高さを合わせている。

**前壁** 前壁には現状で6、7段分の石積みが残存する。基底部として2枚の腰石が配置されている。腰石の床面からの高さは、右側壁側で7cm、左側壁側で4cmである。これらの腰石のうち、左袖部の腰石は羨道のなかばまで突出し、玄門床面としての役割も果たしている。一方、右袖部の腰石は前壁を構成するのみに留まる。ただし、右袖部腰石と左袖部腰石の間には、その空間を補うように小さな石材が立てて据えられている。

**壁体同士の関係** 壁体同士の関係を見ると、両側壁腰石と前壁腰石は、前者の側面に後者の端面が接する形で設置されている。一方、両側壁腰石と奥壁腰石は、前者の端面に後者の側面が接する形で設置されている。前壁を構成する石材は同時に羨道側壁北半も構成する。このことから、少なくとも羨道壁体と前壁壁体は同時に構築されていることが分かる。さらに、玄室の四隅には隅角消しの石材を渡しているため、玄室の各壁体も同時に構築されていることが分かる。



第5図 5号墳石室実測図

玄室床面は、地山岩盤を細かく砕いたものと推定される小礫と粘性の弱い土で形成されている（第8図8層、第9図21層）。床面の標高は13.180m前後でほぼ一定する。

屍床は玄室右側壁沿いに、1箇所が存在するのみである。この屍床を画す仕切り石は、平滑に加工された2枚の板石によって構成されている。南側の石材は、長さ92cm、床面からの高さ23cm、埋設部を含めた高さ29cm、厚さ3.5cmである。南端が一部割れ、中央付近に亀裂が入る。また、上面北側には刳り込みが行われる。それは2段に刳り込まれているようにも見える。北側の石材は、長さ74cm、床面からの高さ23cm、埋設部を含めた高さ31cm、厚さ3.5cmである。北端は一部割れており、中央付近には大きく亀裂が入る。検出当初、北側石材の南上端は欠損していたが、玄室内埋土中の転落石の中からこの部分の破片を検出することができた。これを接合した結果、北側石材には刳り込みが設けられていないことが判明した（第5・6図）。ただし、北側石材南端の高さは南側石材北端の高さとほぼ一致する。したがって、側面から仕切り石を見た場合、南側石材刳り込み部のラインと北側石材上面のラインが直線的にそろうように設置されていることが分かる。

屍床仕切り石

なお、玄室内で断ち割り調査を行ったが、排水溝は存在しなかった。

(山野) 排水溝

## ii) 羨道

羨道は、長さ59cm、幅が羨門側で42.5cm、玄門側で30cmと、狭くて小規模である。現存する高さは、右側壁が50cm、左側壁が60cmである。

羨道

羨道壁体は平らな石材を積むことにより築かれている。長さが50cm程の大きな石材と、15cm程の比較的小さな石材の2種類を用いている。玄室壁体のように、石積み上面の水平を整えるために、小さな石材を用いたと思われるが、羨道壁体の石積み上面は水平ではなく、羨門方向に下降するように積まれている。

羨道壁体

羨道床面の玄室側では、板石によって平坦面がつくられており、玄室の床面より4cm程高くなっている。この板石は羨道部分のみではなく、壁体直下にも置かれている。つまり、床面を構成する板石は、壁体の石積み以前に設置されたものである。ただし、羨道床面の羨門側では板石が見られず、粘質土が検出されたのみである。同様の粘質土は、羨門近くの壁体直下においても見られたことから、羨門付近の羨道床面は、粘質土によって形成されたと考えられる。床面に使用されている板石は、長さ10cm程のものから30cm程のものまであり、すべて自然石である。また先述のように、玄室左袖基底部に見られる腰石が羨道まで突出しており、床面の一部を構成している（第7図）。

羨道床面



第6図 5号墳石室の屍床仕切り石（西から）



第7図 5号墳石室の羨道床面

羨門の閉塞石には、板状に加工した砂岩を用いている。その上端は欠けており、現状での高さは55.5cm、厚さ3.5cmである。埋没しているため不明瞭ではあるが、長さは72cm程と推定される。石材を板状に加工している点は玄室の仕切り石と共通するが、閉塞石は厚さが均一で、平滑面をより丁寧につくりだしており、仕切り石より丁寧な加工が施されている。また、閉塞石の下端は直下にある石材と密に接している。こ

の石材を以下では羨門床石と呼ぶ。羨門床石は閉塞石と同じように丁寧に平滑面がつくりだされている。現状で露出している部分の長さは45cm、厚さは4cmである。

閉塞石と前庭部石積み

閉塞石と羨道壁体前端の間には粘質土が詰まっており、壁体と閉塞石は接していない。前庭部側では、閉塞石の外側に石材を積むことによって閉塞石を押さええていると考えられる（図版2）。しかし、現状では閉塞石と前庭部石積みの間には土が充填されており、直接接していないように観察された。この部分の構造の解明は、今後の課題である。（淵崎）

iii) 屍床（第8図）

屍床

屍床は、玄室右側壁沿いに位置しており、平滑に加工された2枚の板石による仕切り石で区画されている。規模は長さ約1.7m、幅が最長50cm、南端、北端で45cmを測る。屍床床面の標高は13.150m程であり、ほぼ水平である。

初葬面

床面は玄室と同様、地山礫を細かく砕いたような0.5～1cm程の小礫が敷き詰められた層で構成されている（第8図8層）。この層は平坦面を形成し、玄室の床面とほぼ同じレベルである。また、この層の直上から勾玉や白玉といった玉類が検出されており、ここが初葬面であると判断できる。

追葬面

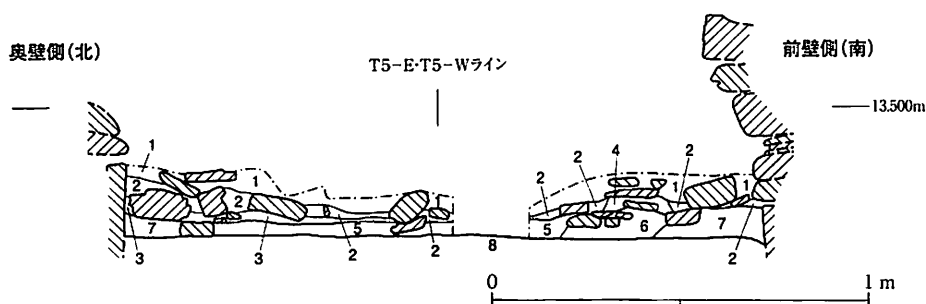
この床面の上には5～7層の間層をはさんで、赤色顔料を含む土層（4層）が堆積していた。5～7層上面は平坦面を形成している。これらのうち7層は石室壁体の間に充填されている土と類似し、さらに壁面に近いことから、壁体充填土が剥落したものである可能性がある。6層直上に堆積する4層は少量の赤色顔料が集中して検出された層である。この赤色顔料はベンガラであることが判明している。したがって、5～7層が平坦面を形成していることと、ベンガラが埋葬に関連するものである可能性を考慮すると、5～7層上面は追葬面であると推定される。以上より、この屍床では、少なくとも2回の埋葬が行われたと判断される。

3層以上の土層については、1～2層が屍床全面に堆積するしまりのよい土であり、3層は7層同様、壁体充填土が剥落したものの可能性がある。これらの層については埋葬行為に関連する証拠が得られなかったため、後世の埋土であると判断した。（松嶋）

(2) 使用石材

石室を構成する石材は全て砂岩であり、水による浸食を受けているものもある。壁体にはさまざまな大きさの石材が使用されているが、そのほとんどが自然石であり、割り石は稀である。

石室石材の中で板状に加工されているものは、仕切り石、閉塞石、羨門床石である。また、L字形をした石材が玄室の四隅に組み込まれることがあるが、これらは加工されたものではなく、L字形の自然石を使用したものである。（堤）



後世の埋土

- 1 におい褐色土 (Hue7.5YR 5/4) 砂粒は細かい。粘質。しまりよし。
- 2 におい黄褐色土 (Hue10YR 6/4) 赤や黒、白の粒が混じる。砂粒は細かい。やや粘質。しまりよし。
- 3 黄褐色土 (Hue10YR 5/8) 赤や黒の粒が混じる。砂粒は細かい。やや粘質。しまりよし。

埋葬に関連する土層

- 4 赤褐色土 (Hue 5 YR 4/6) 砂粒は細かい。やや粘質。しまりややよし。赤色顔料集中。
- 5 明黄褐色土 (Hue10YR 6/6) 赤や黒の粒が混じる。砂粒は細かい。粘質ややあり。しまりよし。
- 6 明黄褐色土 (Hue10YR 6/6) 10cm程の礫が多く混じる。砂粒は細かい。やや粘質。
- 7 明褐色土 (Hue7.5YR 5/6) 黒い粒が混じる。砂粒は細かい。粘質。しまりよし。
- 8 におい黄褐色砂質土 (Hue10YR 7/3) 床面を構成する層。0.5～1cm程の砂粒の層。しまり悪し。第9図21層と同一層。

第8図 5号墳石室屍床内埋土土層断面図

## (2) 墓壙の構造 (第9図、第6表)

ここでは墓壙西断ち割り区、墓壙東断ち割り区、墓壙北調査区および玄室内断ち割り区の調査成果をまとめ、墓壙の構造について考察する。

### i) 墓壙西断ち割り区

墓壙西断ち割り区では、調査区にかかる原位置にない石材を取り上げ、表土を除去した段階で墓壙ラインを検出した。それは石室主軸から西へ約1.8mの位置にあり、墓壙は地山岩盤に直接掘り込まれている。

墓壙西断ち  
割り区

断ち割りにより、標高13.120mの高さで墓壙底と考えられる平坦面を検出した。12層(第9図)は地山礫を含まず、その上面の標高は13.230mで、玄室左側壁腰石上面の標高13.250mとほぼ一致する。11層は地山礫を含む土で、同層上面では控え積み石材が検出されている。この石材の標高は13.430mであり、壁体の持ち送りが開始される標高13.450mとほぼ一致する。10層は地山礫を含む土である。9層と7層は共に大小の地山礫を含み、8層と6層は地山礫をわずかに含む。6～9層では、大きめの地山礫を含む埋土を石室側に充填した後、その外側に地山礫の少ない埋土を充填している。こうすることで持ち送りが行われる石室壁体を補強しているものと考えられる。5層は地山礫を含まない土である。1層、2層は後世の埋土である。なお、西断ち割り区西端の一部は、第4次調査時のトレンチと重複している。

### ii) 墓壙東断ち割り区

墓壙東断ち割り区でも原位置にない石材を取り上げ、表土を除去した段階で墓壙ラインを検出した。それは断ち割り区北端では石室主軸から東に約1.5mの位置にあり、同南端では東に約1.9mの位置で確認された。断ち割り区の北端と南端で石室主軸からの距離に大きく差があり、いびつな平面形をしている。

墓壙東断ち  
割り区

断ち割りにより、標高13.060mの高さで墓壙底と考えられる平坦面を検出した。20層は地山礫を含まない層である。20層の上面付近で石材(第9図石材A)が検出されている。石材A上面の標高は13.170mであり、玄室右側壁腰石上面の標高13.240mよりわずかに低い。17層から19層は地山礫を多く含む埋土である。18層上面では控え積み石材が検出されており、その標高13.480mは持ち送りが開始される標高13.450mに近い。土層の切り合い関係から、18層まで充填された後、墓壙が拡張され、その拡張部に17層が充填されたことが分かる。拡張を行うことで、石室構築作業に必要な十分な空間を確保したものと考えられる。東断ち割り区で検出した墓壙の平面形がいびつであったのは、この拡張行為によるものと判断される。16層、14層は地山礫を含まない。15層、13層は地山礫を含む土で充填されている。13～16層は、西断ち割り区における6～9層と同様の役割を果たしているものと考えられる。

### iii) 墓壙北調査区

墓壙北調査区でも、表土を除去した段階で墓壙ラインを検出した。それはT5-E・T5-Wラインより北に1.6～1.7mの位置にある。北調査区西側では、墓壙西断ち割り区で検出された墓壙ラインから続く隅丸方形の墓壙ラインが確認された。一部の断ち割り調査の結果、石室北側では墓壙壁と控え積み石材との間隔が非常に狭いことが判明した(4層)。

墓壙北調査  
区

### iv) 玄室内断ち割り区

玄室内における墓壙底の標高は13.140mであり、東西の断ち割り区で検出された墓壙底よりもやや高くなっている。一方、腰石下端の標高は東西共に13.000m程であり、東西の断ち割り

玄室内断ち  
割り区



区で検出された墓壙底の標高よりも10cm前後低い。つまり、腰石設置箇所が深く掘り込まれていることが分かる。また、主軸よりやや東側に仕切り石を設置するための掘り込みがあり、その内部は地山礫や砂質土で充填されている（22・23層）。主軸からやや西側にも落ち込みが見られたが（24層）、断ち割り区対面の土層と合わせて検討した結果、石室主軸に対して平行するものでなく、地山の岩脈に沿った落ち込みであることが確認された。おそらく墓壙掘削時に、地山の岩脈に沿って削られたものであろう。なお、墓壙底の直上には地山礫を細かく砕いた小礫が薄く散布され、玄室床面が構成されている（21層）。

v) 墓壙の特徴

**墓壙の特徴** 墓壙は地山岩盤を掘り込んで形成されており、現状で確認できる墓壙の深さは約65cmである。また、その平面形は隅丸長方形をなすと推定され、東西幅は約3.2~3.6mである。

墓壙の東西では、埋土の充填方法などにいくつかの共通する点が見られる。1つ目は墓壙底から腰石の上面付近までは、地山礫を含まない土（12層、20層）を充填している点である。2つ目は、石室内で持ち送りが開始される高さ（標高13.450m）になると、石室側に大きめの地山礫を含む土（7・9層、13・15層）を入れ、その後外側に地山礫の少ない土（6・8層、14・16層）を充填している点である。これは石室壁体を補強するためのものと考えられる。以上のように墓壙の東西において、埋土の性質やそれが変化する標高が共通している。

墓壙東西の断ち割り区の様子から、墓壙底はほぼ平坦面をなすと推定される。しかし、玄室両側壁の腰石下端の標高は東西墓壙底の標高よりも低い。そのため、仕切り石設置のための掘り込みと同様、腰石設置箇所にも掘り込みが設けられているものと考えられる。（弘中）

(4) 石室の構築過程（第5・9図、第6表）

ここで今回の調査成果に基づき、石室の構築過程について述べる。ただし、現存する石室が石室構築当初の状態を保っていると仮定した上で話を進める。

**第1工程** はじめに墓壙を掘削している（第1工程）。前項で述べたとおり、墓壙平面は隅丸長方形状であり、地山の岩盤を65cm以上掘り込んでいる。

**第2工程** 次に石室基底を構築している（第2工程）。玄室では墓壙底に腰石を据えることでプランを確定している（第2工程1段階）。腰石は前壁と奥壁に2枚ずつ、側壁には3枚ずつ配置される。腰石上面のレベルは奥壁右側の腰石を除いて13.240m前後に揃えられている。

両側壁では腰石の端面と端面を合わせ、腰石同士が重ならないように置かれている。一方、前壁では左側の腰石を羨道のなかばまで突出させている。また奥壁では、左側の腰石の端面と右側の腰石の端面とが重なるように置かれている。このような状況は、両側壁の腰石が前壁、奥壁の腰石より先に据えられたために生じたものと考えられる。以上のことから、腰石はまず両側壁の位置に据えられ、その後、前壁および奥壁の位置に据えられたと推定できる。

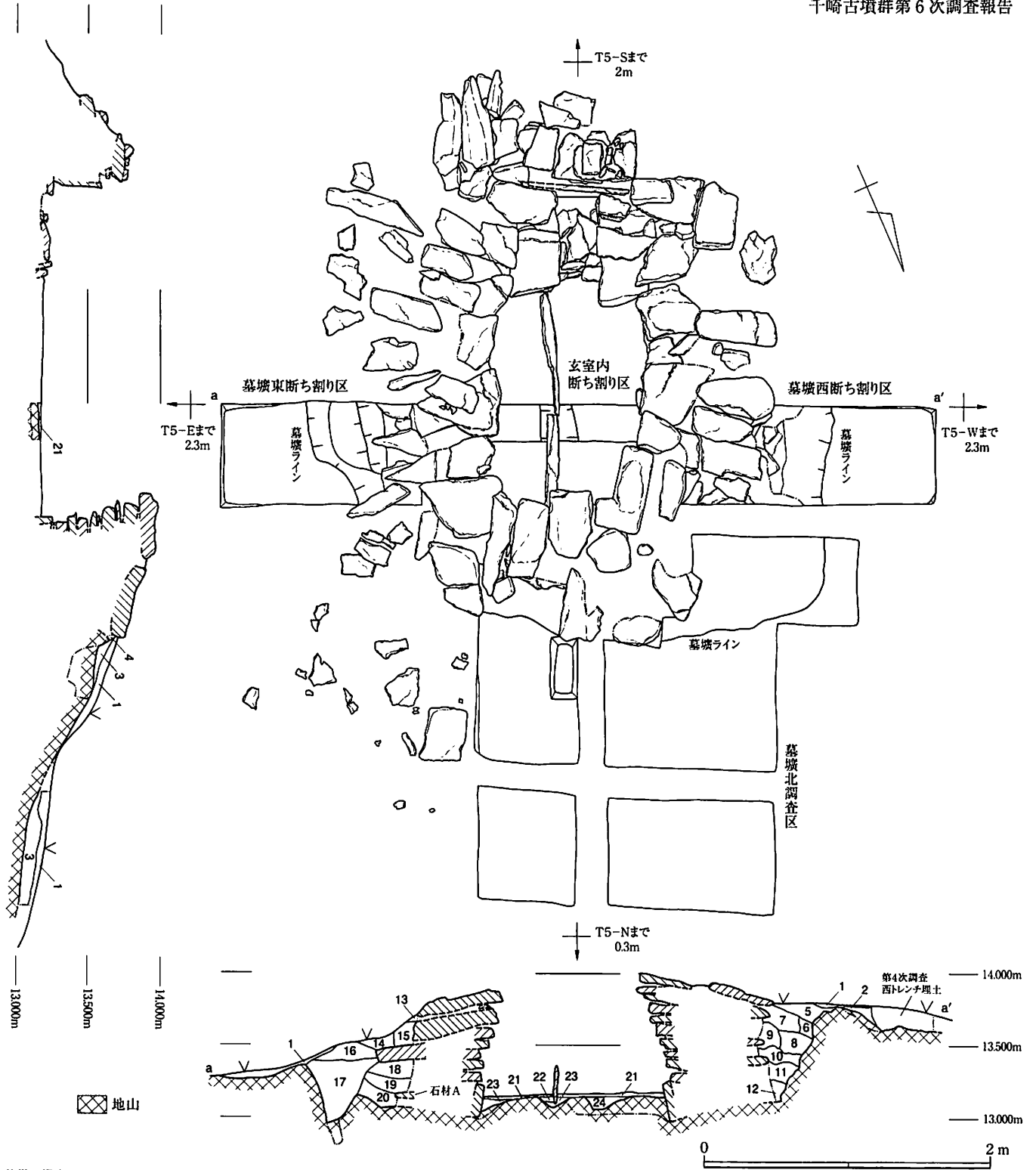
羨道では、玄門から60cm南に羨門床石を配置し、羨道の長さを確定している（第2工程2段階）。また、羨道床面には複数枚の板石が水平に敷かれている。これら板石上面のレベルは標高13.220mで、墓壙東断ち割り区内にみられる石材Aのレベルとほぼ同じである。石材Aは羨道床面の板石同様、水平に敷かれた板石であり、その上

第6表 5号墳石室各部位の標高

地 点	標高	工程	
墓壙底	西端	13.120m	1
	左側壁腰石下端	12.985m	
	玄室内	13.140m	
	右側壁腰石下端	13.010m	
	東端	13.060m	
石室床面*	屍床床面	13.151m	
	玄室床面	13.180m	
	羨道床面	13.220m	
腰石上面*	左側壁腰石上面	13.250m	2-1
	右側壁腰石上面	13.240m	
	前壁腰石上面	13.230m	
	奥壁腰石上面	13.230m	
	奥壁腰石最高点	13.340m	
仕切り石	土端	13.415m	3-2
石室壁体	隅角消し石材を四隅に配置	13.450m	3-2
	石材A上面	13.170m	2
墓壙埋土	11層上面	13.450m	3-2
	18層上面	13.480m	

\* これらの標高は最高点と最低点の平均である。

\*\* 2-1は本文中の第2工程1段階を示す。



後世の埋土

- 1 浅黄色土層 (Hue2.5YR 7/4) 表土層。
- 2 にぶい黄橙色砂質土 (Hue10YR 7/4) しまり悪し。
- 3 明褐色砂質土 (Hue10YR 7/6) 粒子細かい。しまり悪し。

石室に関連する土層

- |   |  |
|---|--|
| 4 にぶい黄橙色砂質土 (Hue10YR 7/3) 地山礫を少量含む。しまり良し。                       | 14 明黄褐色砂質土 (Hue10YR 7/6) 地山礫を含まない。しまり良し。                         |
| 5 にぶい黄橙色砂質土 (Hue10YR 7/3) 地山礫はほとんど含まない。しまり良し。                   | 15 にぶい黄橙色砂質土 (Hue10YR 7/4) 5~10cm程の地山礫を含む。しまり良し。                 |
| 6 浅黄褐色砂質土 (Hue10YR 8/3) 地山礫をほとんど含まない。しまり良し。                     | 16 にぶい黄褐色砂質土 (Hue10YR 7/4) 地山礫を含まない。しまり良し。                       |
| 7 浅黄褐色砂質土 (Hue10YR 8/4) 10cm程の地山礫を含み、その間に2~5cm程の地山礫が見られる。しまり良し。 | 17 淡黄色砂質土 (Hue2.5Y 8/4) 5~10cm程の地山礫を多く含む。しまり良し。                  |
| 8 浅黄褐色砂質土 (Hue10YR 8/3) 地山礫を少量含む。しまり良し。                         | 18 浅黄褐色砂質土 (Hue10YR 8/4) 2~3cm程の地山礫を多く含む。しまり良し。                  |
| 9 淡黄色砂質土 (Hue2.5Y 8/4) 10cm程の地山礫を含み、その間に2~5cm程の地山礫が見られる。しまり良し。  | 19 淡黄色砂質土 (Hue2.5Y 8/4) 4~6cm程の地山礫を多く含む。小礫間に砂質土を含む。しまり悪し。        |
| 10 浅黄褐色砂質土 (Hue10YR 8/4) 10cm程の地山礫を含む。しまり良し。                    | 20 浅黄褐色砂質土 (Hue10YR 8/4) 地山礫を含まない。しまり良し。                         |
| 11 淡黄色砂質土 (Hue2.5Y 8/4) 4~6cm程の地山礫を含む。しまり悪し。                    | 21 にぶい黄褐色砂質土 (Hue10YR 7/3) 床面を構成する層。地山の小礫で構成される。しまり悪し。第8図8層と同一層。 |
| 12 浅黄褐色砂質土 (Hue10YR 8/3) 地山礫をほとんど含まない。しまり良し。                    | 22 にぶい黄褐色砂質土 (Hue10YR 7/5) 粘土質の地山を含む。しまり悪し。                      |
| 13 にぶい黄褐色砂質土 (Hue10YR 7/4) 2~3cm程の地山礫を含む。しまり良し。                 | 23 にぶい黄褐色砂質土 (Hue10YR 7/4) 地山礫を含む。しまり良し。                         |
|   | 24 にぶい黄褐色砂質土 (Hue10YR 7/4) 地山礫を少量含む。しまり良し。                       |

第9図 5号墳調査区平面図・断面図

面のレベルは腰石上面のレベルともほぼ揃っている。つまり、羨道の板石、石材A、腰石上面のレベルはほぼ同じである。以上のことから、複数の板石が腰石上面のレベルに合わせて玄室周辺一面に配置されていた可能性があるといえる。

ここで羨道床面について見てみると、板石は全面に敷かれておらず、板石と羨門床石との間には10cm程度の隙間があり、そこには黄褐色の粘質土が充填されている。羨道の板石が床面形成のために敷かれたものではないと考えれば、この状況も理解できる。しかし、墓壙断ち割り区で検出された板石は石材Aのみであり、板石の配置状況の詳細は不明である。そのため、羨道の板石が羨道床面周辺のみ敷かれた可能性も残っている。

両袖部と羨道では同一石材によって両壁体が構成されているのが分かる。したがって玄室と羨道は並行して構築されたと考えられる。また、羨道の幅は前壁腰石直上に石材を配することで確定されている。このことから羨道幅の確定は、続く第3工程で行われたと考えられる。

### 第3工程

玄室プラン、羨道の長さの確定後、いくつかの段階にわけ石室壁体を構築している（第3工程）。まず各壁体上面のレベルが奥壁右側の腰石上面のレベルと揃うまで石積みながされている（第3工程1段階）。各壁体ともに小さな石材を充填することで上面の水平を整えている。

各壁体上面のレベルがある程度揃った後、標高13.450mまでは石材を垂直に積み上げている（第3工程2段階）。また、垂直に積まれた石材の上面ラインと仕切り石上面のレベルがほぼ一致することから、仕切り石もこの段階に据えられた可能性が高いと考えられる。

ここまでの段階において玄室の四隅を観察すると、南東隅以外では隣接する壁体に跨って置かれた石材が見られる。これらは玄室の隅角を消すため意図的に置かれたと考えられる。南東隅に初めて隅角消しの石材が見られるのは標高13.450mである。このとき四隅全てに隅角消しの石材が配置される。これら石材のレベルはほぼ同じで、次の段階から開始される持ち送りに備えて置かれたものと考えられる。また、墓壙埋土で当段階に対応する層は11層と18層（第9図）である。

隅角消しの石材を四隅に配置した後、持ち送りが開始される（第3工程3段階）。これ以降の墓壙埋土を観察すると、前項で述べた通り、控え積み石材が多く見られる。加えて墓壙埋土中では、地山礫を石室側に多く入れ、壁体を補強している様子もうかがえる（9・15層）。第3工程3段階以降は、玄室壁体を持ち送りながら天井部を穹窿状に近づけていったと考えられる。しかし、現状では石室上部が崩落しているため、天井部は残存していない。

### 第4工程

壁体が完成した後、天井石をのせたと考えられる（第4工程）。第5次調査の際、玄室内埋土中より長さ110cm、幅50cm、厚さ15cm程の巨大な板石が1枚検出されている（図版1-2）。天井石にふさわしい大きさの石材はこれのみであるが、本来の枚数は不明である。

### 閉塞石の設置

羨門床石上には閉塞石が置かれている。現状の閉塞石がどの段階で設置されたものであるかを判断できない。しかし、閉塞石と羨道壁体との間は粘質土で充填され、両石材が完全に密着していないことから、閉塞石は追葬後に設置された可能性がある。

### 初葬の段階

現段階で推定される初葬時の埋葬方法は2通り考えられる。ひとつは、石室完成後に羨道を利用して被葬者を埋葬するという方法である。しかし、前項でも述べたとおり羨道の幅は狭く、人が通るには不向きである。このことからもうひとつの方法として、羨道を使用せずに石室の構築途中で埋葬を行ったということも考えられるが、今回の調査で初葬が行われた段階を明らかにすることはできなかった。

（堤）

## 5. 横穴式石室の遺物出土状況（第10図）

屍床内初葬面から勾玉11点と白玉28点、合計39点の玉類が出土した。これらのうち勾玉10点と白玉13点は初葬面である8層（第8図）直上から原位置で検出された。残る勾玉1点と白玉15点は、調査終了後に行った屍床内埋土のふり作業で発見された。その埋土は全て屍床内南側、原位置で検出された玉類周辺のものである。

出土点数

検出された玉類から次のような出土傾向が確認できる（第10図）。全ての勾玉と白玉は玄室東側、仕切り石で区切られた屍床内南側から出土しており、屍床内北側からは全く出土していない。また、23点の玉類のうち19点が仕切り石東側面近くから検出されている。このことからほとんどの玉類が仕切り石側に密集した状況であるといえる。しかし、勾玉1・6は仕切り石から20cm以上離れた位置から出土しており、上述した玉類の集中部から離れている。ただし、玉類の集中部と勾玉1・6との空間には、ふり作業で検出された玉類のいくつかが分布していた可能性も考えられる。

出土状況

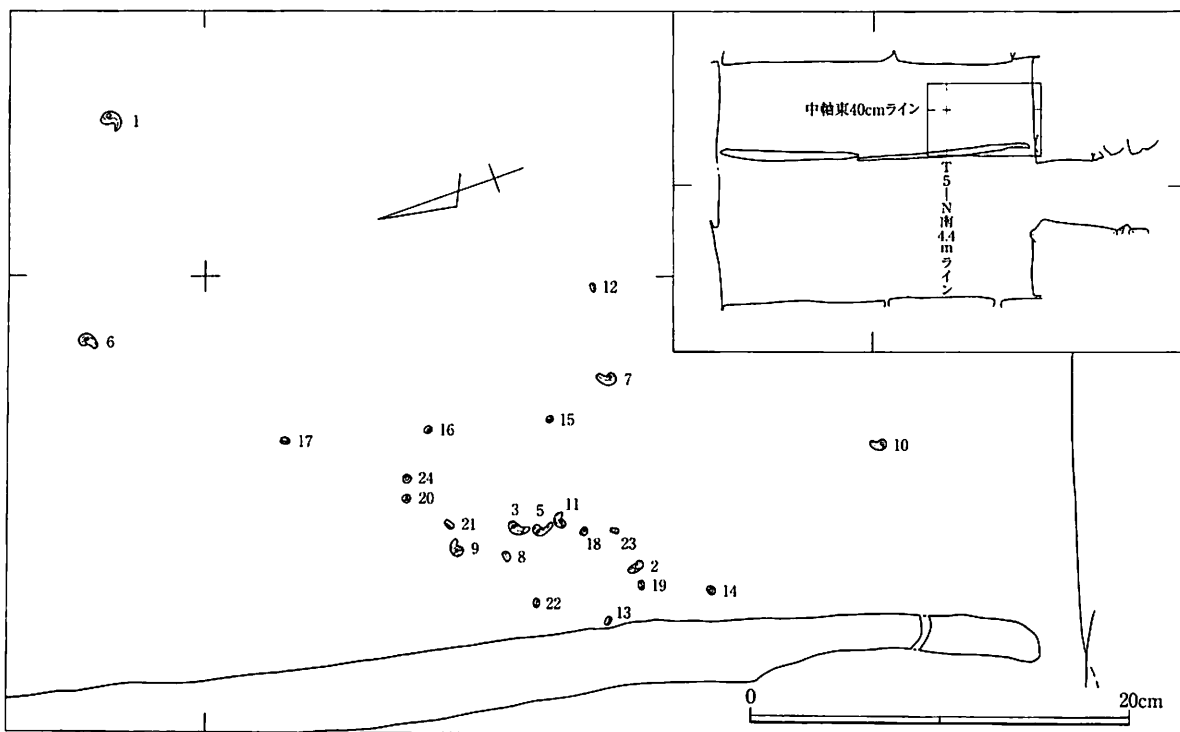
勾玉の中には孔周囲に玉ずれ痕を確認できるものがあるため、一定期間装身具として使用されていたと推測される。しかし、これらの出土状況から、埋葬時に全ての玉類が連結したまま副葬されたとは考えにくい。したがって、被葬者の埋葬の際に、連結していた玉の緒を切り離し、遺体の上半部に撒くという行為を行った可能性も考えられる。

埋葬行為

なお、前述したように、初葬面である8層直上から検出されたこれらの玉類は、屍床内南側に集中して分布していた。このことを重視すれば、初葬時において、埋葬者の頭位は南、すなわち前壁方向に向いていたと考えられる。同様に、追葬面において確認された赤色顔料も屍床内南側に集中していた。赤色顔料は被葬者の頭部付近に散布される傾向があることを考慮すれば、追葬者の頭位も南向きであったと推測することができる。

なお、玄室内から上述した玉類以外の遺物は出土しなかった。

(松崎)

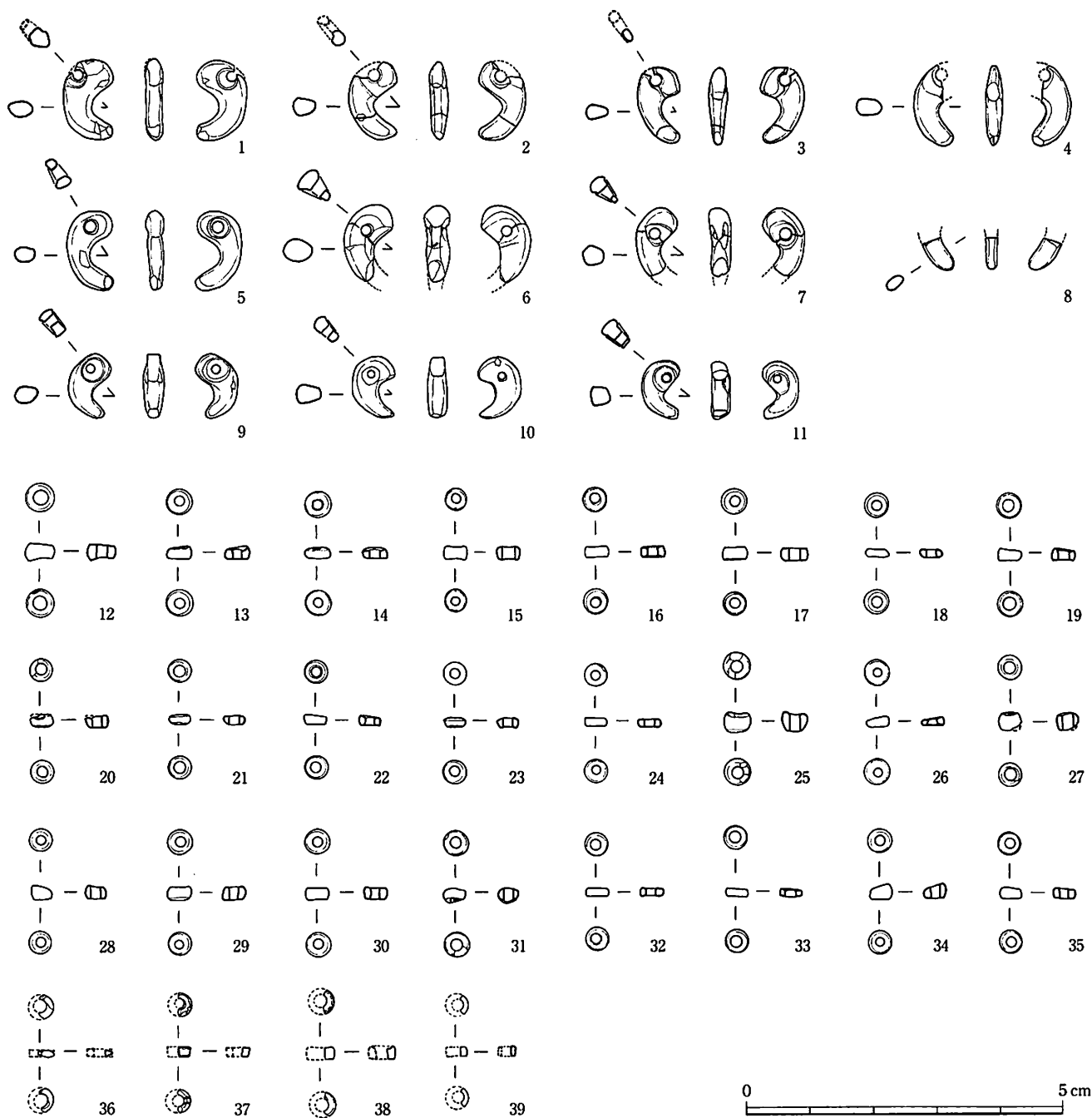


第10図 5号墳石室内遺物出土状況図（番号は第11図、第7・8表に対応する。）

6. 出土遺物

(1) 勾玉 (第11図1~11、第7表)

勾玉 勾玉は計11点出土している。これらのうち10点は原位置で検出できたもので(1~3・5~11)、残る1点はふるい作業により検出されたものである(4)。以後、図面の左を表、右を裏として説明を行う。完形は3点で(9~11)、その他には頭部が一部欠けているもの(1~4)や尾部が一部欠けているもの(5~7)、尾部のみのもの(8)がある。全て緑色凝灰岩製で、淡い灰緑色を呈しており、風化、磨耗が進んでいる。勾玉はその大きさから2つに分けられ、全長11.5mm以上の大きいもの(1~7)と、9~10mmの小さいもの(9~11)とがある。大半



第11図 5号墳出土玉類実測図

第7表 勾玉計測表

図面 番号	出土場所	全長 (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	玉ずれ痕 径 (mm)		備考
							表	裏	
1	屍床南側8層直上	12.8	3.2	2.3	1.5/1.5	0.4	3.0/4.0	○ ○	頭部欠け
2	屍床南側8層直上	12.2	3.6	2.8	1.7/1.7	0.3	—/3.4	× ○	頭部欠け・接合資料
3	屍床南側8層直上	12.2	3.5	2.4	1.8/1.8	0.2	—/—	× ×	頭部欠け・接合資料
4	屍床南側8層直上(ふるい)	12.5	3.9	2.5	—/—	0.2	—/3.2	× ○	頭部欠け
5	屍床南側8層直上	12.5	7.3	3.1	1.8/1.8	0.3	—/3.5	× ○	尾部欠け
6	屍床南側8層直上	11.8	4.5	3.2	1.9/1.9	0.2	—/4.0	× ○	尾部欠け・接合資料
7	屍床南側8層直上	10.4	6.0	3.4	2.0/2.0	0.2	3.5/3.8	○ ○	尾部欠け・接合資料
8	屍床南側8層直上	6.0	3.1	1.8	—/—	0.1	—/—	— —	尾部片
9	屍床南側8層直上	10.0	3.5	3.0	1.4/1.5	0.2	3.7/4.0	○ ○	完形
10	屍床南側8層直上	9.5	4.0	3.0	1.2/1.2	0.2	2.5/—	○ ×	完形
11	屍床南側8層直上	9.0	3.0	2.9	1.3/1.3	0.2	3.6/3.4	○ ○	完形

第8表 白玉計測表

図面 番号	出土場所	直径 (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
12	屍床南側8層直上	4.3	1.4	2.5	2.3/2.1	0.1	完形
13	屍床南側8層直上	4.0	1.2	2.0	1.5/1.5	0.1	完形
14	屍床南側8層直上	4.0	1.2	1.5	1.6/1.6	0.1	完形
15	屍床南側8層直上	3.7	1.1	1.8	1.6/1.6	0.1	破損・修復済
16	屍床南側8層直上	3.7	1.0	1.7	1.6/1.7	0.1	完形
17	屍床南側8層直上	3.7	1.0	1.6	1.7/1.8	0.1	完形
18	屍床南側8層直上	3.7	1.0	1.3	1.5/1.5	0.1	完形
19	屍床南側8層直上	3.7	0.9	1.6	1.8/1.9	0.1	破損・修復不可能
20	屍床南側8層直上	3.6	1.0	2.0	1.5/1.5	0.1	欠け
21	屍床南側8層直上	3.5	1.0	1.5	1.5/1.5	0.1	完形
22	屍床南側8層直上	3.5	1.0	1.4	1.6/1.8	0.1	完形
23	屍床南側8層直上	3.5	1.0	1.4	1.6/1.6	0.1	完形
24	屍床南側8層直上	3.5	1.0	1.3	1.5/1.5	0.1	欠け
25	屍床南側8層直上(ふるい)	4.2	1.3	3.0	1.5/1.5	0.1	欠け
26	屍床南側8層直上(ふるい)	4.0	1.4	1.5	1.4/1.7	0.1	完形
27	屍床南側8層直上(ふるい)	3.8	1.0	2.5	2.0/2.0	0.1	欠け
28	屍床南側8層直上(ふるい)	3.7	1.1	1.7	1.8/2.0	0.1	完形
29	屍床南側8層直上(ふるい)	3.6	1.2	2.0	1.5/1.5	0.1	完形
30	屍床南側8層直上(ふるい)	3.6	1.0	1.8	1.7/1.7	0.1	完形
31	屍床南側8層直上(ふるい)	3.6	1.0	1.7	1.6/1.6	0.1	欠け
32	屍床南側8層直上(ふるい)	3.6	1.0	1.3	1.5/1.5	0.1	完形
33	屍床南側8層直上(ふるい)	3.6	1.0	1.1	1.6/1.7	0.1	完形
34	屍床南側8層直上(ふるい)	3.5	1.1	2.4	1.4/1.4	0.1	完形
35	屍床南側8層直上(ふるい)	3.5	1.0	1.7	1.5/1.5	0.1	完形
36	屍床南側8層直上(ふるい)	3.8	1.0	1.0	—	0.1	破片資料
37	屍床南側8層直上(ふるい)	3.6	1.0	1.6	—	0.1	破片資料
38	屍床南側8層直上(ふるい)	3.5	1.2	2.0	—	0.1	破片資料
39	屍床南側8層直上(ふるい)	2.8	1.0	1.4	—	0.1	破片資料

※表中の重量に関して、0.1と記しているものについては、0.1g以下のものである。

※表中の「—」は計測不可能であることを示し、「○」は玉ずれ痕が有ることを、「×」は無いことを示す。

※表中の孔径、玉ずれ痕径は「勾玉の表(白玉の上)面の最大径/勾玉の裏(白玉の下)面の最大径」を示す。

の玉には孔の周囲に径2.5~4mmの玉ずれ痕が見られる。表裏面ともに玉ずれ痕があるのは4点(1・7・9・11)、表面のみは1点(10)、裏面のみは4点(2・4~6)である。3には玉ずれ痕は見られず、8は頭部が欠失しているために不明である。

## (2) 白玉(第11図12~39、第8表)

白玉は計28点出土している。これらのうち13点は原位置で検出できたもので(12~24)、15点はふるい作業により検出されたものである(25~39)。17点は完形で、5点は一部が欠けており(20・24・25・27・31)、4点は破片資料である(36~39)。15・19の2点については、実測中の不注意により破損してしましたが、15は破片の接合、修復を行っている。

白玉は勾玉と同じく緑色凝灰岩製であり、淡い灰緑色を呈している。形状はほぼ正円に近く、丁寧に作られている。上下端面に関しては、3つの形態がある。まず、上下の面が研磨されて平らになっているもの(17・24・32)、次に角が丸みを帯びており、胴部が張り出すもの(21・23・34)、そして孔の周囲がややくぼんでいるもの(13・16・26)である。これらのくぼみや角の丸みは、玉ずれによってできた可能性がある。(筒)

## 四 10号墳の調査成果

### 1. 過去の調査

現状

10号墳は東尾根東端の頂部に位置し、8号墳から東に20mの地点に所在する箱式石棺である。西側には9号墳が、主軸間距離2mのところ隣接している。この2つの箱式石棺の主軸はほぼ平行していることから、密接な関係をもって築かれていたという可能性も想定されている(森編2005)。

10号墳の調査は、過去3回にわたって行われている。

第1次調査

まず、熊本県立玉名高等学校考古学部による1955年の千崎古墳群第1次調査である(田辺1955a、1955b)。このとき石棺内から4体の人骨が発見されており、頭位方向は3体が北、1体が南であったという。また、棺内より副葬品は出土していないが、棺床には厚くさんご珠が敷いてあると報告された。

その後、上天草市による第3次調査、第5次調査が、それぞれ2004年と2006年に実施された(森編2005、三好・仙波編2007)。

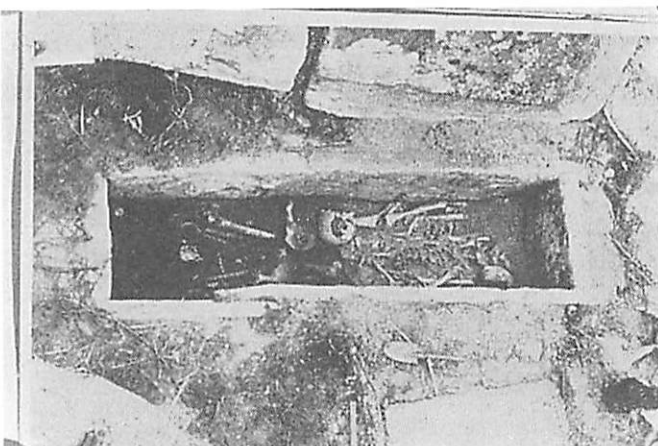
第3次・第5次調査

まず、第3次調査では、その時点での現状実測図が作成された。それを受けて、第5次調査では、石棺の構造および構築過程の解明を目的とし、第1次調査から約50年ぶりに蓋石が取り外され、棺内外の発掘調査が行われた。その結果、墓壙の切り合い関係から9号墳築造ののち10号墳が築造されたことや、墓壙がテラス面を造り出す二段墓壙であることが明らかとなった。棺内から遺物は検出されなかったが、第1次調査の取り残しと思われる人歯が2本発見された。また、第1次調査時にさんご珠とされたものが、石灰藻であることも判明した。さらに、断ち割り作業の過程において、北側棺外の下段墓壙埋土上面から、鉄製ミニチュア農工具が5点(鎌、鉋、刀子、斧、器種不明鉄器)検出される成果があった。(田上)

### 2. 調査目的

調査目的

以上のように、第5次調査では棺外北側のテラス面において、鉄製ミニチュア農工具の副葬が確認された。しかし、この時の調査では、棺外面の一部を掘り下げたにすぎなかったことから、未発掘の棺外テラス面に他の副葬品が存在する可能性も考慮された。今年度の調査は、その有無を確認することを目的として実施した。(田上)



第12図 第1次調査時の10号墳(坂本1971より)

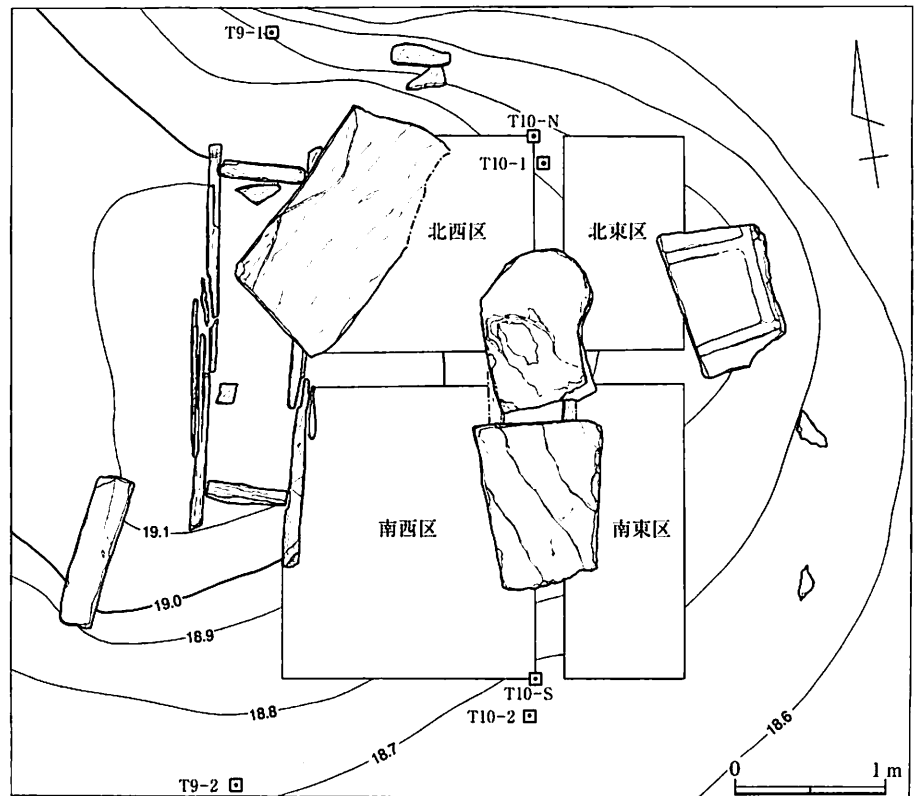


第13図 10号墳棺身全景(第5次調査)

### 3. 調査区の設定と調査経過

今年度の調査では、第5次調査時に設定されたT10-NとT10-Sを結ぶラインを主軸として用いた。その方向はN8.5°Eである。また、調査区も第5次調査時と同じ範囲に設定した。

調査経過については、まず昨年度調査終了時に埋め戻した埋土を取り除いて昨年の完掘面を検出した。次に、昨年度の調査で未発掘であった部分の上段墓壙底を検出するため、墓壙埋土の掘り下げを行った。その際、北西区と南西区において下段墓壙埋土上面から、砂岩石材片が密集して検出された。それらの取り上げを終えた後、全調査区内の上段墓壙埋土を完掘した。



第14図 10号墳調査区設定図 (左：9号墳、右：10号墳)

また、各ベルトについては、下段墓壙ラインが検出される位置までの掘り下げを行った。

以上の結果、石棺に伴う副葬品は確認されなかった。ただし、上段墓壙埋土の掘り下げの過程で、北東区から土器片が出土した。しかし、これは石棺に伴うものではなく、石棺を構築する際の墓壙埋め戻し時に混入したものであると判断した。

発掘調査と並行して、上段墓壙埋土のふるい作業を行った。しかし、これによっても鉄器などの副葬品は確認されなかった。また、石材加工痕を詳細に観察し、拓本を作成した。その作業の過程で、棺身の一部に赤色顔料の付着を確認したため、分析用のサンプルを採取した。その後、調査区内を埋め戻して棺蓋を元の位置に戻し、10号墳における調査は全て終了した。

なお、調査終了後の整理作業において、10号墳周辺の散布石材片が北側蓋石と接合することが判明した。これは、昨年度の土層解釈の変更を迫る成果となったが、その内容については後に述べる。

(田上)

### 4. 調査成果

#### (1) 墓壙の構造 (第15図)

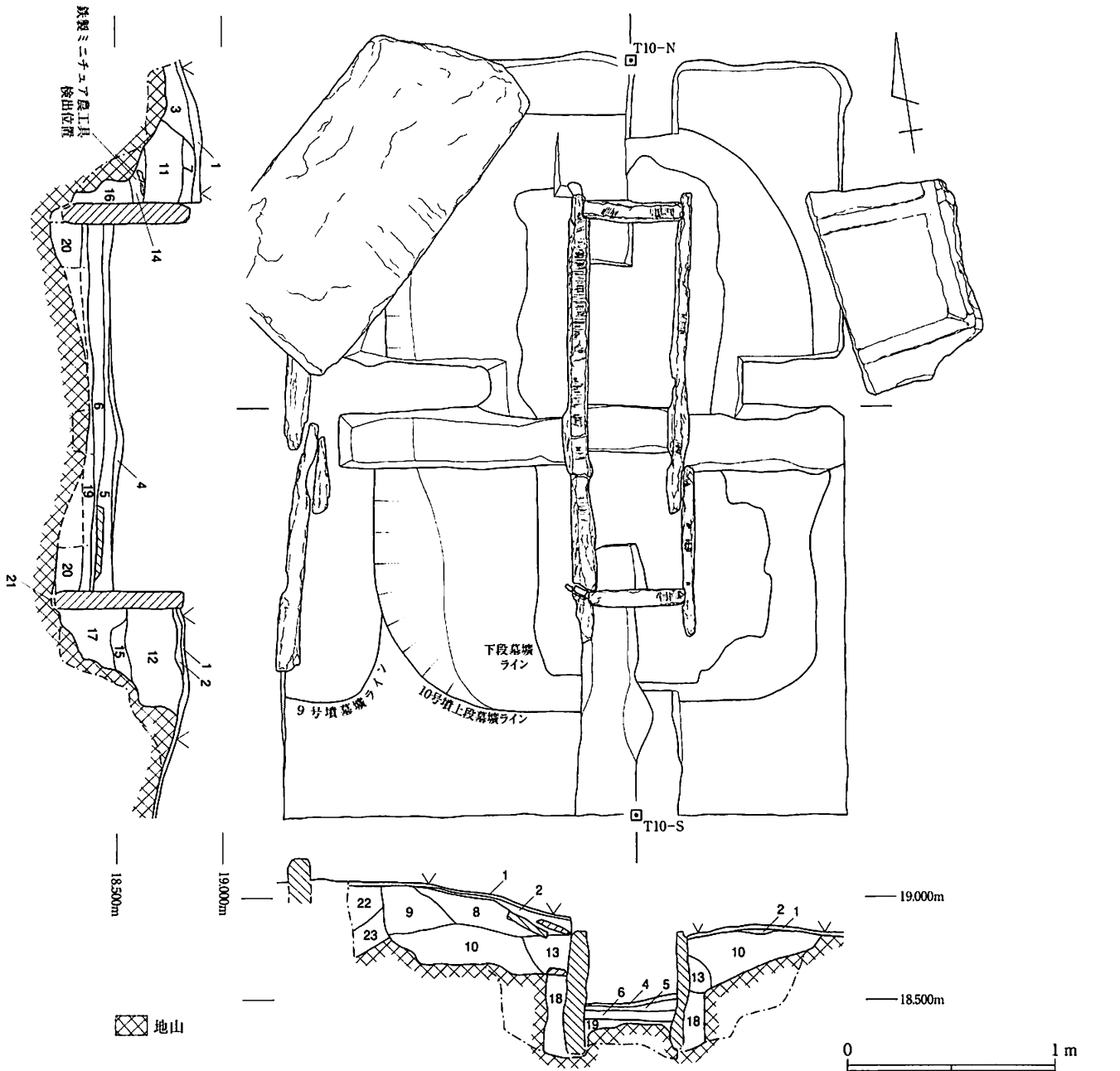
10号墳の墓壙は、テラス面を形成する二段墓壙である。

上段墓壙は検出面において長軸2.84m、短軸2.15mの隅丸長方形のプランである。上段墓壙底のテラス面は、東西南北とも標高18.6m付近でほぼ同一レベルに揃えられているが、その様子はそれぞれの方向で異なっている。西側の上段墓壙壁は直線的で、比較的急な立ち上がりとなっている。そのため、上段墓壙壁下端のラインが明瞭であり、その部分に広く平坦なテラス面を形成している。それに対し、東側の墓壙壁は整った直線状に掘り込まれていないため、その下端のラインが不明瞭である。その結果、テラス面が西側ほど明瞭に形成されていない。こ

上段墓壙



四 10号墳の調査成果



後世の埋土

- |   |   |
|---|---|
| 1 褐色土 (Hue7.5YR4/4) 表土層。                | 4 暗褐砂質土 (Hue10YR3/4) 腐植土。木の枝、落ち葉を多く含む。しまり悪し。    |
| 2 にぶい黄褐砂質土 (Hue10YR5/4) 地山礫を少量含む。しまり悪し。 | 5 褐砂質土 (Hue10YR4/4) 植物の根を多く含む。石灰藻が混じる。しまり悪し。    |
| 3 にぶい褐砂質土 (Hue7.5YR5/4) 土の粒子は細かい。しまり悪し。 | 6 にぶい黄褐砂質土 (Hue10YR5/3) 石灰藻が混じる。土の粒子は細かい。しまり悪し。 |

10号墳に関連する土層

- |   |   |
|---|---|
| 7 にぶい黄褐砂質土 (Hue10YR5/4) 石灰藻を多量に含む。粒子は細かい。しまり良し。 | 15 淡黄粘質土 (Hue2.5Y 8/3) 礫を少量含む。粒子は細かい。粘質。      |
| 8 にぶい黄橙岩質土 (Hue10YR7/3) 礫を多量に含む。粒子は粗い。          | 16 淡黄岩質土 (Hue2.5Y 8/4) 礫を少量含む。やや粘質。           |
| 9 浅黄橙岩質土 (Hue10YR8/3) 礫を多量に含む。粒子は粗い。しまり悪し。      | 17 明黄褐岩質土 (Hue10YR6/6) 礫を少量含む。やや粘質。           |
| 10 浅黄橙岩質土 (Hue10YR8/3) 礫を多量に含む。しまり悪し。           | 18 にぶい黄橙粘質土 (Hue10YR7/4) 礫を少量含む。粒子は細かい。       |
| 11 浅黄橙粘質土 (Hue10YR8/4) 礫を少量含む。やや粘質。             | 19 黄褐岩質土 (Hue10YR5/6) 棺床整地土。石灰藻を少量含む。         |
| 12 にぶい黄橙粘質土 (Hue10YR7/4) やや粘質。                  | 20 にぶい黄橙粘質土 (Hue10YR7/4) 礫を少量含む。粒子は細かい。しまり良し。 |
| 13 淡黄粘質土 (Hue 5Y 8/3) 粒子は細かい。しまり良し。             | 21 にぶい黄橙粘質土 (Hue10YR6/6) 粒子は細かい。しまり良し。        |
| 14 淡黄粘質土 (Hue2.5Y 8/4) 礫を少量含む。やや粘質。             |   |

(※ 7~14: 上段墓壇埋土、15~18: 下段墓壇埋土、19: 棺床整地土、20・21: 棺内墓壇底置き土)

9号墳墓壇埋土

- |   |  |
|---|--|
| 22 浅黄橙粘質土 (Hue7.5YR8/3) 土の粒子は非常に細かい。粘質。 | 23 浅黄橙砂質土 (Hue10YR8/3) 植物の根を多量に含む。しまり良し。 |
|---|--|

第15図 10号墳調査区平面図・断面図

の違いは、西側を石棺構築の作業場とするために、他の区域よりも丁寧にテラス面を構築しようとした結果生じたものである可能性が考えられる。南北方向においては明瞭なテラス面を形成しない。しかし、下段墓壙の埋土（第15図15・17層、16層）上面が水平面をなすことから、この部分が棺外テラス面の役割を果たしていたと考えられる。

下段墓壙は石棺を埋設するためのもので、その上面の平面形は長軸2.5m、短軸0.84mのい 下段墓壙  
びつな長方形を呈している。また、南東区においては、20cm程東側に幅広となっている。これはおそらく石棺を組み立てる際、東長側石南側石材の設置を容易にするために墓壙の幅を広げたものと考えられる。下段墓壙底は、長側石を据える箇所が溝状に1段深く掘り込まれている。この溝を含めた墓壙底の規模は、長軸1.9m、短軸0.79mを測る。

なお、墓壙の深さは、棺身上面から測ると61.5cmである。また、上段墓壙および下段墓壙 墓壙埋土  
とも、その埋土は地山岩盤に由来する粉碎土や礫によるものである。（有馬）

## （2）副葬品および砂岩石材片等出土状況

昨年度の調査で検出した鉄製ミニチュア農具は、北側棺外のテラス面上の粘質土層（第15 鉄器の出土  
図14層）から出土している。今回の調査では、上段墓壙底のテラス面の高さまで、埋土の掘り下げを行ったが、鉄器等の副葬品は検出されなかった。そのため、下段墓壙底の様相は未確認であるが、10号墳においては、昨年度検出した鉄製ミニチュア農具以外の棺外副葬品は存在しない可能性が高いと判断される。

ただし、西長側石に近接する位置のテラス面上の粘質土層（13層）、すなわち下段墓壙埋土 石材片の出土  
上面から、砂岩の大形石材片と細かな石材片が集中して検出された（第16図）。細かな砂岩石  
材片は全調査区において上段墓壙埋土（10～14層）から検出されているが、まとまって出土したのはこのみである。

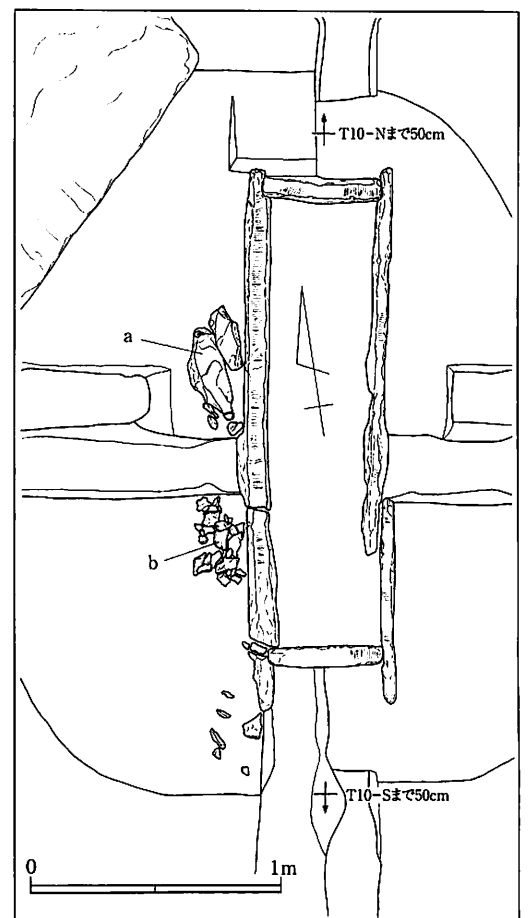
昨年度検出した鉄製ミニチュア農具は、テラス面上に置かれている。このことから、テラス面まで埋め戻した段階が1つの区切りとなり、ここで何らかの葬送儀礼が行われ、その際に鉄器が副葬されたと考えられている（三好・仙波編2007）。下段墓壙埋土上面出土のこの石材片も、その出土位置から、鉄器副葬とほぼ同じ段階に置かれたものであると思われる。

一方、この石材片集中区から検出されたもの以外の埋土中の石材片については、細片がわずかに散布しているだけであったため、墓壙埋土への混入品であると思われる。

なお、北東区の岩質土層（10層）中より土器片が2個体分出土したが、検出の際、土器片の周囲に上層からの掘り込みの痕跡は見られなかった。さらに、観察の結果、10号墳が築造される以前の時期の土器であると確認された。これらのことから、この2個体分の土器は上段墓壙を埋め戻す過程において混入したものであると判断される。（有馬）

## （3）北側蓋石と散布石材片の接合

昨年度の調査報告で、棺外西長側石沿いの上段墓壙埋土上面から検出された石材片（第19図⑪～⑬）について、石棺構築過

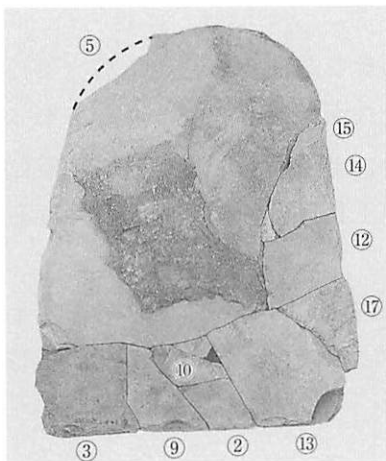


第16図 下段墓壙埋土上面石材片検出状況図

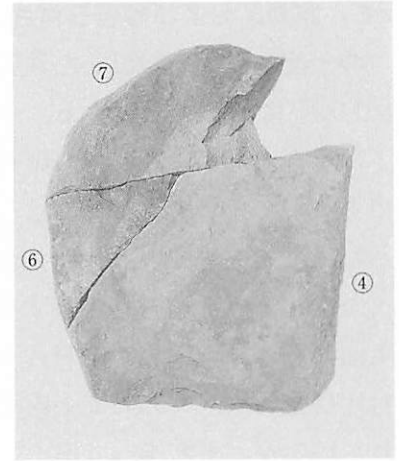
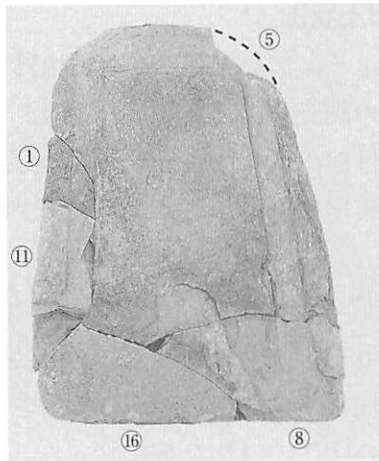
程において現地で石棺材を微調整した際に剥離したものであるという見解を述べている（三好・仙波編2007）。しかし、これらの石材片は北側蓋石の欠損した部分であることが明らかになった（第17・19図）。なお、第17図の接合状況では破線で示しているが、この部分には石材片⑤（第19図）が接合することを確認している。

こうした北側蓋石と散布石材片の接合に関しては、調査後の整理作業によって明らかになったことであるため、接合、復元後の北側蓋石の実測図を作成することができていない。また、真俯瞰写真の撮影も行えていない。こうした作業については、次年度以降に実施することを予定しているが、現段階において推定できる復元後の北側蓋石の大きさは、おおむね長さ130cm、幅80cmになるとと思われる。

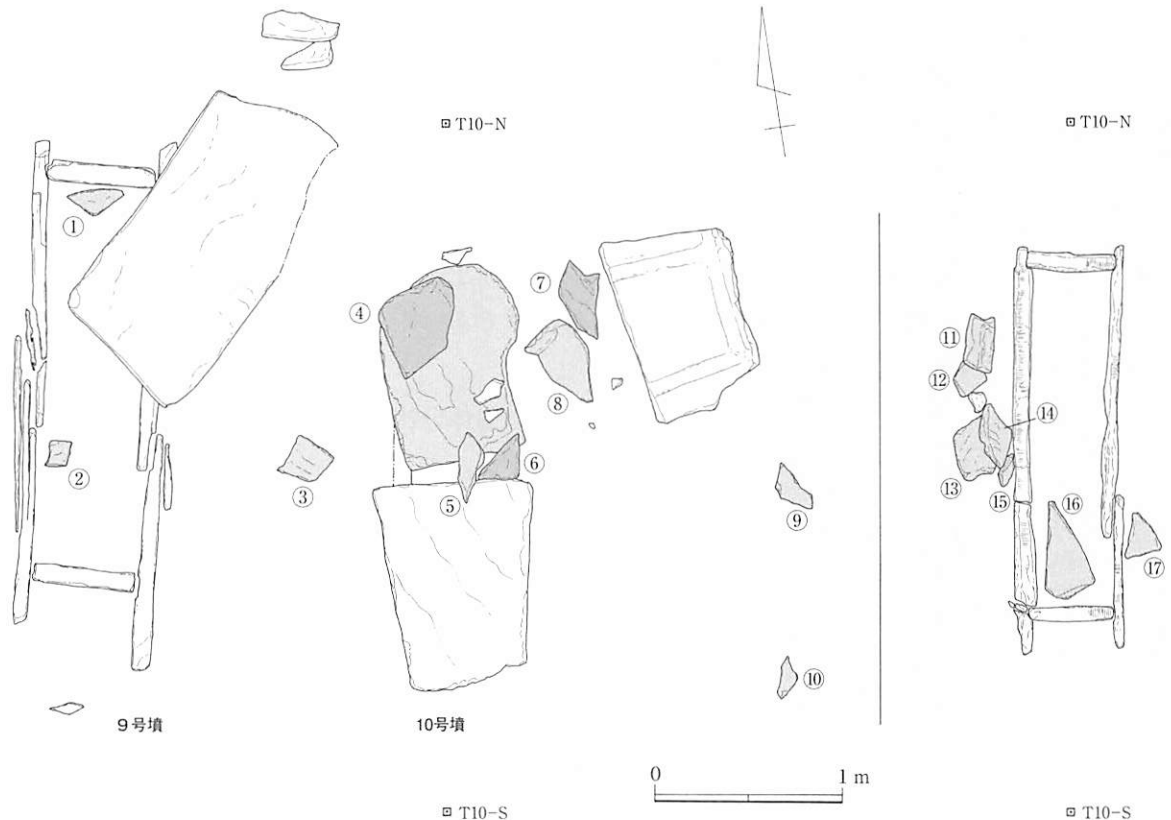
なお、蓋石がいつ破損したのかは現時点では判断できない。しかし、第1次調査時の写真では、北側蓋石は欠損していないように見受けられる（第12図）。このことから推測すると、少



第17図 10号墳北側蓋石接合状況（左：表面、右：裏面）（斜め俯瞰）



第18図 使用場所不明石材



第19図 北側蓋石破片および使用場所不明石材片散布状況図（左：棺蓋取り上げ前、右：棺蓋取り上げ後）

なくとも第1次調査時あるいはそれ以降に何らかの理由で北側蓋石の一部が破損し、その破片石材が10号墳周辺に散布したと考えられる。上段墓壙埋土は後世にかく乱されておらず、下段墓壙埋土（第15図18層）上面出土の石材片（第16図）は、石棺構築時に伴うものであることが明らかである。したがって上段墓壙埋土（8・13層）上面検出の石材片（第19図⑪～⑮）と、下段墓壙埋土上面出土の石材片は全く性格を異にするものであると判断される。

なお、10号墳蓋石に接合するものとは別に、長さ57cm、幅48cm、厚さ6.5cmの板石に復元される石材片も10号墳の近辺に散布していた（第18図、第19図④・⑥・⑦）。これに関してはどの古墳に伴う石材か不明である。（有馬）

使用場所不明石材

#### （4）西断ち割り区の土層解釈変更

昨年度の報告（三好・仙波編2007）においては、上段墓壙埋土上面検出石材（第19図⑪～⑮）は上段墓壙埋土（第15図8層）中に含まれるものとされていた。しかし、前項で述べた理由により、この石材は後世の埋土（2層）に包含されるものとすべきである。こうした所見にもとづき、第15図横断面の関連箇所については昨年度提示の図を変更した。（有馬）

土層解釈の変更

#### （5）石棺製作にともなう石材加工

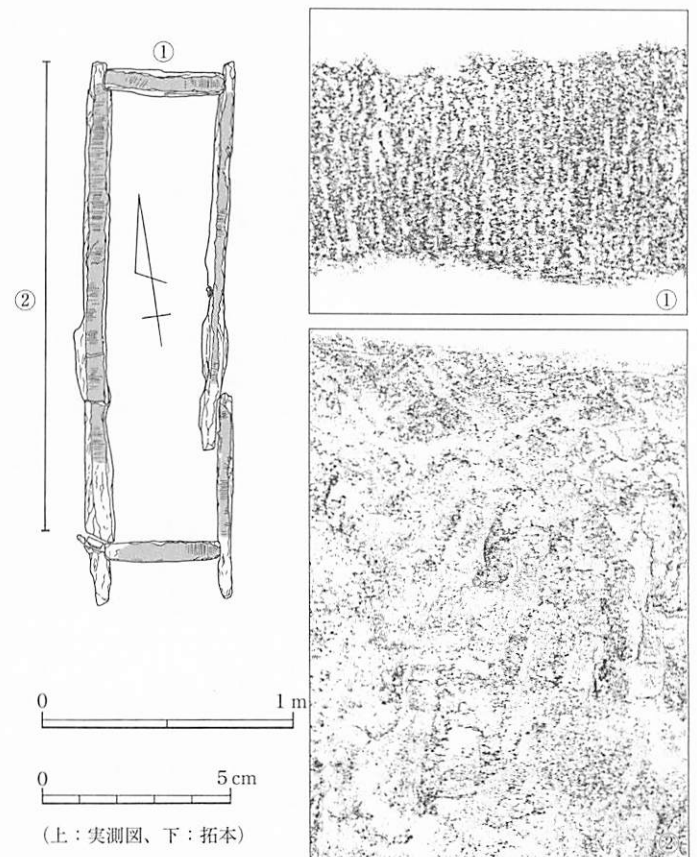
##### i) 石棺の観察

10号墳の埋葬施設は箱式石棺である。棺身は小口石と長側石からなり、底石は存在しない。小口石はそれぞれ1枚、長側石は西側が1枚、東側が2枚の石材により構成される。また棺蓋は2枚の石材からなる。棺身、棺蓋を構成する石材は全て砂岩であり、岩石の中では軟質であるとされている。

古墳時代における石棺や石室の石材製作は、石切り場で石を切り出す「山取り」、石棺や石室石材の形がほぼ出来上がるまでの成形段階である「粗作り」、そしてその後の表面調整の段階である「仕上げ」の順に3つの段階を踏んで行われた。今日、石棺や石室石材の表面を観察した際に確認できる工具痕のほとんどは「仕上げ」段階のものであるとされている（和田1991）。

今回、棺身および棺蓋を観察した際に、幅や長さが異なる数種類の加工痕が確認された。このことから、チョウナやノミ状の工具など数種類の工具が使用されたと推測した。以下、観察された工具痕について詳しく述べる。

**棺身**（第20図） 棺身石材上面において明瞭なチョウナ叩き痕が見られた（第20図①）。叩き痕は幅2cm程度で、これは工具の刃幅におおむね等しいと考えられる。また、叩きの方向はほぼ統一されており、石材の長辺に直交している。棺蓋と接する棺身上面はこのチョウナ叩きによって極めて平滑に仕上げられており、他の面と比べて寧



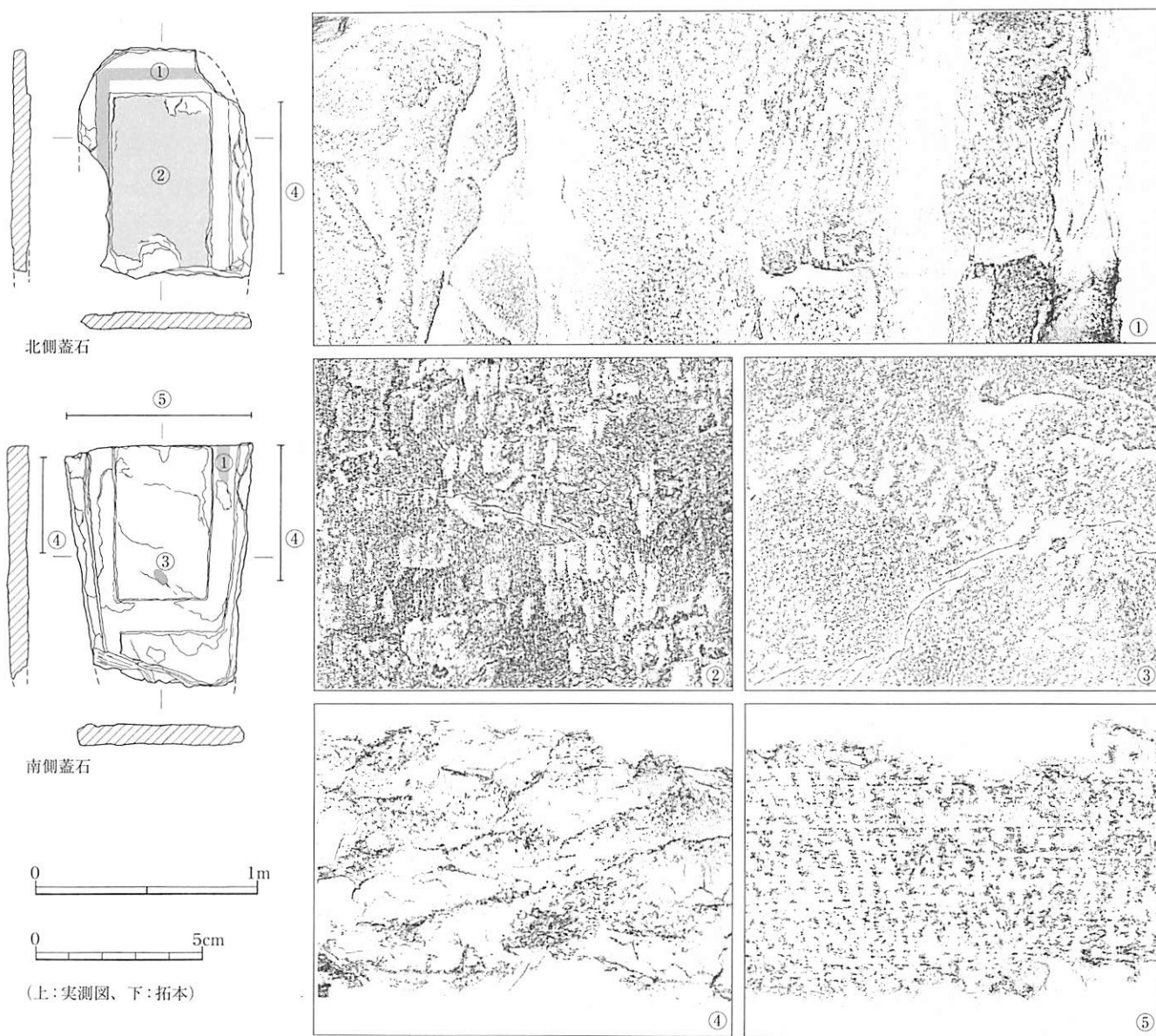
第20図 棺身の加工痕  
①棺身上面チョウナ叩き痕、②西長側石外側面チョウナ削り痕

に形成されたと推測される。このように棺身上面にチョウナ叩きを施す例は、千崎古墳群と同じ維和島内に所在する越路北古墳の箱式石棺においても確認されている（杉井2007）。

西長側石の外側面と、上面と側面の角において、チョウナ削り痕と思われる工具痕を確認した（第20図②）。西長側石外側面には、幅1 cm程度、長さ2～3 cmの削り痕が残っている。削りの方向は縦横さまざまである。一方、西長側石以外の石材の外側面においては、明瞭な工具痕は確認できなかった。ただし、全ての石材において、チョウナ削りによる上面と側面の角の面取りが見られた。

**棺蓋（第21図）** 今回の調査では蓋石の裏面、すなわち棺身と接する面と側面とを観察した。その結果、本来工具痕が存在したが剥離してしまった部分があることが分かった。特に南側蓋石は剥離が著しい。

両蓋石の裏側には、棺身上面と接する位置に棺身の形に沿うよう矩形凹状加工を施している。南北蓋石それぞれの凹状加工部の底面を観察すると、明瞭ではないが一部に凹状加工に平行するチョウナ叩き痕が見られた（第21図①）。また、北側蓋石の凹状加工部の側面において明瞭



第21図 棺蓋の加工痕 ①南側蓋石裏面チョウナ叩き痕、②北側蓋石裏面工具痕、③南側蓋石裏面工具痕、④南側蓋石側面チョウナ削り痕、⑤南側蓋石北合わせ面チョウナ叩き痕

ではないが、部分的に幅1 cmの連続する加工痕を確認することができた。この加工痕は、他のチョウナによる加工痕とはその幅や長さが異なる。そのため、これらは刃幅が狭いチョウナもしくはノミ状の工具による加工痕であると考えられる。

石材中央部の凹状加工が施されていない部分においては、幅0.5cm、長さ1 cmの加工痕が多数確認された（第21図②・③）。特に、北側蓋石には明瞭な加工痕が残っている。これらの加工痕は、北側蓋石の凹状加工部の側面に見られる加工痕と同様、刃幅が狭いチョウナもしくはノミ状工具によるものであると考えられる。加工の方向は石材の部分により縦横さまざま、特に規則性は見られない。一部、工具を平行に移動させながら同一方向に繰り返し削ることにより、複数の削り痕が重なっているような部分もあった。

南北蓋石の側面にはそれぞれにチョウナ削りやチョウナ叩き痕が観察された（第21図④・⑤）。また、加工・整形を行わずに石材の自然面をそのまま残した部分も認められた。

北側蓋石の西側面南半部は、無駄な部分を叩き落とした後にチョウナ削り、チョウナ叩きにより調整している（第21図④）。また、南側蓋石と接する部分は、チョウナ叩きにより平滑にされているが、部分的に自然面を利用している。南側蓋石は、南側面については欠落しており、接合する石材破片が見つからないため加工痕を確認できなかった。しかし、両側面の北半部において幅1 cm程度のチョウナ削り痕がそれぞれ確認された。また、北側蓋石と接する南側蓋石北合わせ面は、チョウナ叩きによって平滑に仕上げられており、他の面より丁寧な加工が施されていることが分かる（第21図⑤）。（岩田）

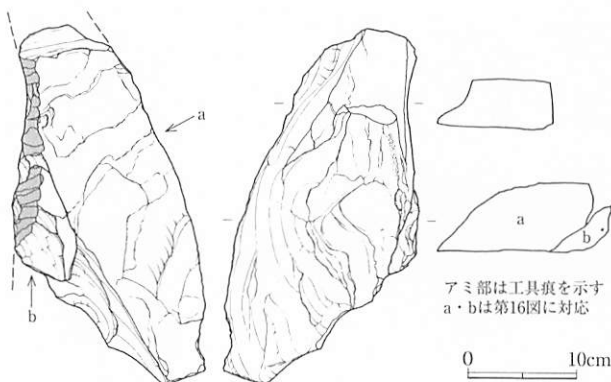
## ii) 下段墓壇埋土上面出土石材片の観察

下段墓壇埋土上面出土の石材片について接合を試みたところ、全80点中9点の石材片が接合した。1点は剥離面接合で、他は全て折れ面接合であった。接合資料は全体の中ではごくわずかであるが、これら80点の石材片は、色調・石質などの特徴から、同一の原石から割り出されたものである可能性がある。

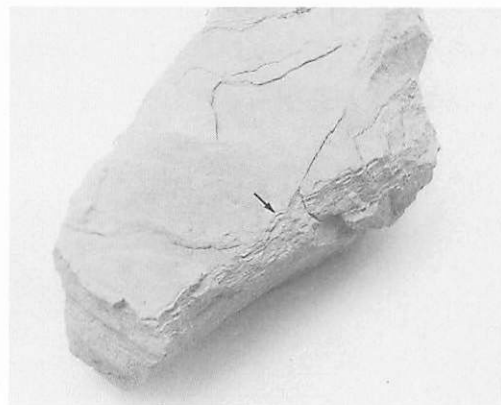
石材片の接合

このうち、北西区と南西区から検出され、剥離面接合した石材片 a と石材片 b（第16・22図）には、チョウナもしくはノミ状工具による明瞭な加工痕が認められた（第22・23図）。この加工痕（第22図アミ部）は、工具によって連続する調整を施すことにより、石材の端部を直線的に形成しようとした意図が見られるものである。しかし、この加工を施した後に何らかの理由、おそらく調整もしくは修正のために石材が割られている。第22図アミ部と類似の工具痕は、北側蓋石の凹状加工部の側面においても見られる。a・b以外の石材片は、打面・打点

石材片の観察



第22図 工具痕のある石材片（a・b）接合状況図



第23図 石材片 a・b の工具痕

残る剥片と、端部が欠損し、剥片の形状が復元できない石片であり、工具痕は認められなかった。a・bを含むこれらの下段墓壙埋土上面出土石材片は、その石質が石棺材と同様であるという点や、蓋石に見られるものと類似する工具痕が見られる点などから、石棺材と原石を同一にするものと想定される。すなわち、これらの石材片は整形を意図して加工を加えた際に剥離した破片や、石棺材製作時の廃棄品であろうと思われる。しかし、石棺材の細部加工をした際に生じた石材片であると考えれば、その数量は極めて少ない。そのため、石棺を設置する近辺で石材の加工・調整を施し、生じた石材片の一部を西側棺外の下段墓壙埋土上面に集中させて置いたものと考えられる。(有馬)

iii) 小結

石棺材の製作

10号墳石棺は、「山取り」「粗作り」「仕上げ」という一連の工程を経て製作されたと想定される。石材の採石場については、現在でも、千崎丘陵から2 kmほど南に下った海岸において、千崎古墳群に見られるものと非常によく似た石質の砂岩が観察される。このことから、千崎古墳群において用いられた石材は、この近辺にて採取することが可能であったと想定される。そして、石棺材として板状に成形した後、運搬し、現地で「仕上げ」の加工を施したものと考えられる。棺身・棺蓋に見られる加工痕や、下段墓壙埋土上面出土の石材片は、この現地での細部加工の際生じたものであると思われる。(有馬)

(6) 赤色顔料

赤色顔料

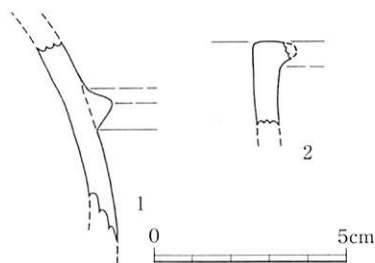
石棺材の一部に赤色顔料が観察された。その位置は、南小口石内面および上面と南側蓋石の凹状加工部、さらに棺内埋土である。そこで、南小口石内面および上面に付着していたものと、棺内埋土の赤色顔料をサンプリングした。赤色顔料の詳細については現在分析中であるが、それらはベンガラであるとの報告を受けている。(有馬)

(7) 石棺築造以前の土器

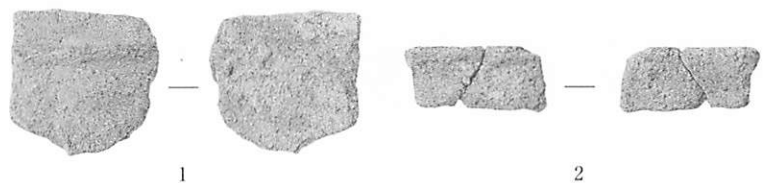
土器

北東区の上段墓壙埋土(10層)中から弥生土器と思われる土器片3点が出土した。1点は調査時に検出され(第24図1)、他2点は埋土のふるいがけ作業によって検出された。ふるい作業によって検出された2点は接合したため、同一個体であることが判明した(第24図2)。これらは全て上段墓壙を埋め戻す際に混入したものと思われる。

第24図1は小破片のため全体の形状は判然としないが、壺形土器の胴部上半部であると思われる。上部に突帯をめぐらせている。色調は淡黄色で、焼成は良好である。胎土は緻密で、1~5 mm程度の砂粒を含んでいる。2は甕の口縁部であると思われる。口縁は逆L字形の形状をなす。色調は浅黄色で、焼成は良好である。胎土は緻密で、1 mm程の砂粒を含んでいる。いずれの土器片とも、摩耗が激しいため調整は不明である。なお、詳細な時期は特定できないが、形状などから弥生土器と推測される。(高松)



第24図 土器実測図



第25図 土器(左:外面、右:内面)

## 五 まとめ

### 1. 調査成果

千崎古墳群ではこれまで数次にわたる調査が行われ、成果が挙げられてきた。本書では5号墳、10号墳の発掘調査について報告をしている。以下、今回の調査成果について簡潔にまとめ、これまでの成果と合わせて千崎古墳群の特徴を検討したい。

5号墳は千崎丘陵の東尾根に位置する直径約6mの円墳である。主体部として墳丘の中央に横穴式石室が構築されている。横穴式石室の主軸方向はN19°Eで、東尾根筋と直交する。石室の上半分は崩落し、残存していない。 5号墳

横穴式石室の玄室プランは長方形を呈し、全長2.27m、玄室長1.68m、同幅1.25mを測る。各壁体は基底部に板状の腰石を配し、その直上に石材を平積みすることで構築されている。現在、天井部は残存していないが、持ち送りの様子から天井は穹窿状を呈していたと考えられる。屍床は右側壁沿いに1箇所存在し、仕切り石によって画されている。屍床の規模は長さ1.7m程、幅45cm程である。仕切り石は板状に加工された2枚の板石で構成される。仕切り石のうち南側の石材の上面北側は2段に刳り込まれているように見える。側面から見ると、南側石材刳り込み部のラインと北側石材上面のラインが直線的にそろうように設置されている。 玄室

羨道は長さ59cm、幅は最長42.5cm、最短30cmと狭く、小規模である。羨道壁体の石積み上面は羨門方向に下降するように積まれている。羨道床面は、玄門側では板石を敷くことによって、羨門側では粘質土を充填することにより形成される。閉塞石は長さ72cm程、厚さ3.5cmで、直下にある羨門床石同様、丁寧に平坦面が造りだされている。この閉塞石と羨道壁体の間には粘質土が見られ、直接接していない。前庭部側では、閉塞石の外側に石材を積むことによって閉塞石を押さえていると考えられるが、この部分については未調査で、構造は不明である。 羨道

屍床の初葬面直上からは勾玉11点と白玉28点が検出された。玉類には玉ずれ痕が見られることから、一定期間装身具として利用されていたことが分かる。また、これら玉類の出土状況から、埋葬時に玉の緒を切断し、被葬者の周囲にばら撒いた可能性が考えられる。さらに、玉類が検出された床面の上面に、平坦面をなす層を確認することができる。この層直上にはベンガラが散布されていた。こうした状況から、この平坦面は追葬面と判断される。また、玉類の集中とベンガラの散布が屍床内の南側にのみ見られることから、初葬、追葬のいずれも頭位は南であった可能性が高い。なお、玉類以外の副葬品は出土しなかった。 屍床

墓壙は、現状で地山を65cm程掘り込むことで形成され、墓壙底には平坦面を持つ。その平面形はおおよそ隅丸長方形を呈するものと推測できる。墓壙底に腰石や仕切り石を設置するための掘り込みを設けている。墓壙は、墓壙底から腰石の上面付近のレベルまでは地山礫を含まない埋土によって充填される。しかし、持ち送りが始まる段階になると、控え積み石材を多く配置し、墓壙埋土中には大きめの地山礫を入れることで石室壁体を補強している。 墓壙

石室の構築過程は大きく4つの工程に分けられる。第1工程が墓壙の掘削、第2工程が基底部の構築、第3工程が石室壁体の構築、第4工程が天井石の配置である。 構築過程

第2工程では、墓壙底に腰石を据えることで玄室プランを確定している。腰石は、その配置状況から、初めに両側壁に3枚ずつ据えられ、その後前壁、奥壁に2枚ずつ据えられたことが



分かる。続いて、羨道では、羨門床石を配置することで長さを確定している。またこの工程で、羨道床面の板石、墓壙東断ち割り区内にみられる石材A、そして腰石上面がほぼ同じレベルにそろえられている。このことから複数の板石が腰石上面のレベルに合わせて玄室周辺に配置されている可能性もある。

第3工程ではいくつかの段階にわけ石室壁体を構築している。まず、奥壁右側の腰石上面のレベルと高さがそろうまで各壁体に石積みがなされる。次に、標高13.450mまで壁体が垂直になるように石材を積み上げる。屍床仕切り石も、その上面のレベルがこの高さとはほぼ等しいことから、これと同じ段階で据えられた可能性が高い。この時、初めて四隅全てに隅角消しの石材が配置され、持ち送りはこの段階から開始される。その後、第4工程で天井石を乗せるまで、持ち送りされながら壁体が積まれたと推測できる。

これまでの調査により、5号墳では墳丘の形態、規模、石室構造、構築過程を把握することができた。ただし、前庭部構造の確認が今後の課題として残されている。

**10号墳** 10号墳は東尾根東端の頂部に位置し、8号墳から東に20mのところの所在する箱式石棺である。その主軸方向はN8.5°Eであり、東尾根筋と直交している。

**墓壙** 墓壙の形状は、テラス面を有する二段墓壙である。上段墓壙は、検出面において長軸2.84m、短軸2.15mの隅丸長方形のプランである。上段墓壙底のテラス面は、石棺の西側が広く平坦に形成されている。下段墓壙は上面が長軸2.50m、短軸0.84mの長方形プランであるが、石棺の南東側では20cm程東側に幅広となっている。墓壙の深さは、棺身上面から測ると61.5cmである。墓壙埋土は、地山岩盤に由来する粉砕土や礫によるものである。

**石棺に伴う遺物** 昨年度の調査で、北側棺外のテラス面上から5点の鉄製ミニチュア農工具が検出された。今回の調査でテラス面の位置までの未発掘部分を掘り下げたが、副葬品と思われる遺物は検出されなかった。そのため、10号墳の副葬品はミニチュア農工具のみであることが確認された。しかし、西側棺外のテラス面上より、砂岩石材片が集中して検出された。これは石棺石材の加工・調整を施した際に生じた石材片の一部であると思われる。その出土位置から、ミニチュア農工具を副葬したのとはほぼ同じ段階で意図的に置かれたものと考えられる。

**石棺加工痕** 10号墳石棺石材には、千崎丘陵周辺で産出する砂岩が用いられている。棺身・棺蓋には、チョウナなどの工具による製作の痕跡を確認することができる。

**赤色顔料** また、棺内に塗布されていた赤色顔料がベンガラであることが判明した。赤色顔料の付着は15号墳箱式石棺でも確認されている（森編2005）が、10号墳の分析の結果をふまえると、それもベンガラである可能性が高い。

**石棺に伴わない遺物** なお、上段墓壙埋土中から弥生時代の所産と思われる土器片が見つかった。これは墓壙埋め戻し時の混入品と思われるが、現在までに千崎丘陵周辺において、弥生時代の遺跡は知られていない。この土器の発見により、近辺に遺跡が存在する可能性が示されたと言える。

## 2. 古墳群の評価と今後の課題

**5号墳** 5号墳は石室の構造において、従来の編年観（高木1994）からすると、比較的新しいと考えられる要素と、古い要素の両方を持ち合わせている。以下に、類似する構造をもつ古墳と比較しながら、5号墳の石室構造に関して考察する。

**構造の比較** 5号墳の羨道は非常に狭く、短い。また、羨道壁体は板石を積むことで形成されている。このような構造で小規模の羨道を持つ古墳として、天草の大戸鼻北古墳が挙げられる。また、羨

道には板石が敷かれているが、これら板石は壁体直下にも置かれているため、壁体を形成する以前に配置されたと考えられる。このような板石の配置は、宇土半島有明海沿岸部の城2号墳でも確認できる。さらに、屍床が1列のみの古墳として、緑川中流域に所在する塚原古墳群の将軍塚古墳が挙げられる。以上のような構造的特徴は古墳時代前期末葉～中期前葉の様相を示している。ただし、5号墳は、羨道床面と玄室床面のレベル差がほとんどないこと、玄室が長方形プランであること、基底部構造として腰石を据えることなど、古墳時代中期後半以降に盛行する構造的特徴も持ち合わせている。

5号墳の時期について、杉井健は、玄室や羨道の壁体が板石平積みである点、羨道の造り方が大戸鼻北古墳に類似する点、墳丘調査などでも須恵器が検出されていない点などから、古墳時代中期前葉から中葉と推定している（杉井2007）。

なお、第4次調査の段階では、羨道は使用されていない可能性が指摘された（前田編2006）。しかし、追葬の際、天井石をはずし、穹窿状の壁体を破壊することなく埋葬を行うことはきわめて困難であると考えられる。このため、羨道の利用については慎重に考察する必要がある。

次に、10号墳についての評価を行う。石棺の構造や構築過程などの詳細な検討は、昨年度の報告によって行われている。そのため、ここでは今回の調査によって得られた所見から、石材加工技術と、葬送儀礼に関する評価をしておきたい。

10号墳は、小口の構造がH字形で、長側石と小口石が組み合わさる部分に凹状の削り込みが施され、また長側石の継ぎ部はカギ状に加工されている。これらは、千崎古墳群の箱式石棺の特徴とされている（前田編2006）。その他にも、石棺材にはチョウナなどの鉄製工具を用いて精緻な加工を施していることが確認された。これらのことから、10号墳はできるかぎり密閉度を高めるため、隙間を造らないように考慮されている造りであると思われる。観察された加工の痕跡は、10号墳を構築した人々の石材加工技術の高さを具体的に示していると言える。

10号墳は、下段墓壙に棺身を設置し、掘り上げた土を下段墓壙に充填することによってテラス面を形成している。そして、このテラス面まで埋め戻した段階を一つの区切りとして、鉄器を用いた葬送儀礼を行っている（三好・仙波編2007）。これと同じ段階で、石棺構築の際に生じたものであると思われる石材片をテラス面の一箇所に集めるようにして置いている。これと同様に、二段墓壙の棺外テラス面上に鉄製農工具を副葬し、石材を置くという事例は、久留米市に所在する福聚寺7号墳3号主体部においても見られる（小澤・立石2005）。福聚寺7号墳3号主体部は木棺墓である。このように、石材を用いない墓制においても、同様の行為が行われていることが確認できる。ただし、この石材片を置くという行為が葬送儀礼によるものかどうかは不明である。

千崎古墳群においては、これまでに横穴式石室と箱式石棺の発掘調査が行われている。その結果、それぞれの古墳の構造が確認され、遺物の出土や構築方法の解明などの成果を得ることができた。千崎古墳群には箱式石棺や横穴式石室の他に、石障を有する可能性のある7号墳（前田編2006）や、石棺系石室の可能性を持つ12号墳（三好・仙波編2007）など、さまざまな主体部構造を持つ古墳が存在すると考えられる。また、箱式石棺においては無加工の石材を使用したものや、緻密な加工を施したものなど、その内容には差異が見られる。このように、複数種類の墓制が同一丘陵上に存在する千崎古墳群の継続的な調査を行うことによって、天草諸島における石室構造の地域性、墓制の伝播の様相が解明されるだろう。（山野・有馬）

## 参考文献

- 池水寛治 1982『長島の古墳』長島町教育委員会
- 小澤太郎・立石雅文 2005『福聚寺古墳群』久留米市文化財調査報告書第207集 久留米市教育委員会
- 木村龍生 2007「中九州における中期古墳の編年」『九州島における中期古墳の再検討』第10回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集 九州前方後円墳研究会：pp. 161-181
- 甲元眞之・杉井健編 2007『上天草いにしへの暮らしと古墳』上天草市史大矢野町編 1 上天草市
- 坂本経堯・坂本経昌 1971『天草の古代』私家版
- 城二号墳発掘調査団編 1981『城二号墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第3集 城二号墳発掘調査団・宇土市教育委員会
- 杉井 健 2007「古墳時代の矢野」『上天草いにしへの暮らしと古墳』上天草市史大矢野町編 1 上天草市：pp. 123-345
- 杉村彰一 1955「千崎古墳群発掘調査記」『玉高新聞』第34号 熊本県立玉名高等学校新聞部
- 高木恭二 1994「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮嶋クリエイト』第6号 宮嶋利治学術財団：pp. 109-132
- 高木正文編 1984『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会
- 田辺哲夫 1955a『玉名高等学校考古学部の天草郡維和古墳群調査結果について』熊本県立玉名高等学校
- 田辺哲夫 1955b『天草郡大矢野町維和古墳群調査概要』熊本県立玉名高等学校
- 古城史雄 2007「肥後の横穴式石室について」『日本考古学協会2007年度熊本大会研究発表資料集』日本考古学協会2007年度熊本大会実行委員会：pp. 35-55
- 前田真由子編 2006「千崎古墳群第4次調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』2 上天草市：pp. 1-26
- 松本健郎他 1983『上の原遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告第58集 熊本県文化財保護協会
- 三好栄太郎・仙波靖子編 2007「千崎古墳群第5次調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』3 上天草市：pp. 1-36
- 森幸一郎編 2005「千崎古墳群第2次・第3次調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』1 上天草市：pp. 1-38
- 和田晴吾 1991「石工技術」『古墳時代の研究』5 雄山閣：pp. 127-143